
ミルディア国戦記

竹中半兵衛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ミルディア国戦記

【Nコード】

N8672W

【作者名】

竹中半兵衛

【あらすじ】

唯一神ゼメウスを信奉する大国ゼメキア教国が隣国ミルディアへの侵攻を決定した・・・

迎え撃つミルディア国・・・

王太子ルイ・アルトワは争いごとを好まないやさしい青年・・・

その性格ゆえに、国中の人間から『懦弱な王子』として笑いにさえなっていた。

しかし彼のそばにいる一握りの人間だけは知っていた。ルイは決し

て情弱ではなく、卓越した能力の持ち主だということ。

今敵国の侵略に際し、大切な人を守るためにルイは情弱者のベールを脱ぎ捨て戦いに身をゆだねることとなる……

神託

大陸の中でも巨大な版図を有する大国……

ゼメキア教国は、ゼネウスという唯一神を信奉する政教一致国家である。

国の統治を行うのは教皇イカロス4世、そして実質教皇の元で国家の政治を行っていたのは名門アークス家出自の大將軍カイン・アークスとその妹である衛將軍レオナ・アークスの二人である。

わずか28歳と26歳のこの兄妹は、見る見るうちに出世を遂げこの要職につくやいなや一気に版図を拡大し、その天才的な軍事手腕を世に知らしめた。

また内政においても比類なき才を見せ、ゼメキア教国はまさに隆盛の極みともいえる時代にあった……

「……………」

ゼメキア教国の王都ベルニアの王宮の執務室……

カイン・アークスが内政報告を部下から受けている。

その知性をたたえた鋭い視線を書類から外さずカインは静かに部下の報告を聞き終えた。

「ごくろつだつたな、これで今年の冬の食糧備蓄は問題あるまい」

「はっ、閣下の政策のおかげです」

「……………」

カインは執務室の入りに口に視線を投げた。

慌しい足音とともに部屋の扉が開けられた。

「その様子だと命令が下ったようだな……レオナ」

カインは入ってきた妹レオナ・アークスを見やっていった。
「ええ……ミルディア侵攻の命令が下ったわ」

レオナ・アークスは美しい金髪をかきあげ興奮気味に言った。
「ゼネウスの神から神託が下った……異教徒の国、ミルディアを滅ぼせと」

「……ミルディア……」

カインは静かにつぶやいた。

<……これで冬の食糧備蓄を一気に食い潰すわけか……>
カインの顔に自嘲的な笑みが浮かんだ。

「ミルディアには天魔王と呼ばれる7人の師団長あり、その下にも精鋭があまたひしめいている。簡単に滅ぼせと信託が下ったが、実際はそんなに楽な仕事ではない」

「でも神託よ？ 教皇様が言ってたわ。私たちにはゼメウスの神のご加護があると」

「……」

カインは妹の顔を見やって少しため息をついた。同じ兄妹でもカインとレオナのゼメウス教への信奉度合いは全く違う。カインの本質は徹底した現実主義者だった。

今の国力でミルディアに全面戦争を挑んだところで、勝算は五分五分。

仮に制圧できたとしても戦争の痛手から回復するには数年かかるだろう……

「教皇様！」

レオナがはっとして床にひざまずいた。カインもゆっくりとレオナに習う。

部屋に入ってきたのは教皇イカロス4世だった。

「カインよ！ 話は聞いたか？」

イカロスが甲高い声で言った。

「・・・・・・・・・・は・・・・・・・・」

カインは苦々しく頷いた。教皇イカロスは驚くほど小男である。その小男が最高位の紫の法衣を着て自分を見下ろしている・・・・・・・・カインはため息が出る思いだった。

「神託がくだったとか・・・・・・・・」

「そうじゃ！西の異教徒の国ミルディアは呪われておる！呪われた異教徒に死の救済を与えよとのゼメウス神よりの神託じゃ！」

「しかしながら・・・・・・・・」

カインは静かにイカロスを見上げた。

「今年の冬は厳しいものになると予想され、今からの食糧備蓄が必須・・・・・・・・そんな中での遠征は・・・・・・・・」

「カイン！！」

甲高い声がカインをさえぎった。となりで跪いているレオナの肩がびくりと震えた。

「何度も言わせるな。これは神託じゃ。食糧のことは心配ない。神はわれらを見捨てたりはせぬ」

「・・・・・・・・」

カインは小さくため息をついた。

この男に何を言っても無駄だろう。ミルディアの全土制圧を目指す一部版図を制圧すれば納得するだろう・・・・・・・・

こうしてゼメキア教国のミルディアへの侵攻が決まった・・・・・・・・

第1天魔王

ミルディア王国……

大陸の穀倉地帯を有する列強の中でもゼメキア教国に匹敵する国力を有する国である。

『英王』と称えられる国王リチャード・アルトワ1世のもと天魔王と呼ばれる7人の師団長たちがその下に属している。

国王リチャードが自ら見出し取り立てたこの天魔王たちの活躍によってミルディア王国はリチャードの代でその版図を一気に広げ、ゼメキア教国に匹敵するまでになった。

今国王リチャードの前にその天魔王の一人シャロン・ハイラルが跪いている。

第5天魔王の師団長である彼女は幼少のころよりリチャードの手元で帝王学を学んだいわゆる教え子の一人である。

弱冠18歳で第5天魔王に取り立てられて3年、彼女の立て続けにあげた戦功は枚挙に暇がない。

「いよいよゼメキアが動き始めた様子」

シャロンがそのよく澄み渡る鈴のような声で言った。

「うむ……戦となるな……」

リチャードは苦々しく言った。彼がミルディアをここまでの大国にした手腕は何も武力だけではない。

その卓越した外交能力で、彼は常にミルディアの立場を守り続けてきた。

ただゼメキア教国のみが一切の外交的な交渉をはねつけ続け、ついに関戦となりそうなのだ。

リチャードがため息をつくのも無理はない・・・

「シャロン」

「はい・・・」

「この戦、あやつの初陣にしようと思う」
「・・・！！」

シャロンの端正な口元が苦笑を浮かべた。

「第6天魔軍につけようと考えておる」

「キーナも災難ですね・・・」

シャロンの皮肉っぽい言葉にリチャードも思わずため息をついた。

「散々逃げ続けてきたが、あやつもいつまでも戦経験がないではすまされぬ」

「そうですね・・・」

「お前には苦勞をかける。あやつにしっかりともらいたくて婚約者などにしてしまったが・・・」

「・・・ご心配なく」

シャロンは肩をすくめて見せた。

「私を孤児院より救い出してくださってからこの方、リチャード様には並々ならぬご恩があります。」

「恩か・・・あやつ・・・ルイのことを支えてやってくれ・・・頼む」

そついうりチャードの顔は、英王のものではなく一人の父親の顔だった。

「ルイは今どちらに・・・？」

「ふん・・・おそらくは中庭で油を売っておるわ・・・」

リチャードはにやりと笑った。

「好きにいたせ。引きずつても軍議につれてまいれ」

「かしこまりました」

シャロンも苦笑すると立ち上がった。

ミルディアの王都ゴンドール・・・

王城の中央に広がる中庭で一人の青年が寝そべったまま静かに寝息を立てている。

「ルイ様・・・」

そばには10歳くらいの少女が座っている。

「そろそろ軍議のお時間では・・・？」

「有難う、マリア・・・」

青年は目を開きにつこりと笑った。女性のように端正に整った顔立ち、優しい瞳が印象的なその青年は立ち上がると大きく伸びをした。

「面倒だな・・・軍議なんて」

「・・・」

マリアと呼ばれた少女はクスリと笑った。

一見普通のどこにでもいそうな少女だが、唯一目を引くのはその瞳の色だ。

まるで血のような真っ赤な瞳をしている。

「戦いをなさるのですね・・・」

「仕方がないだろうね。父上もいつまでも僕が出陣しないのでは格好がつかないもの」

青年はすっと目を細めた。

「ルイ!!」

よく通る透き通った声が青年を呼んだ。

「やあ・・・」

青年の顔にうれしそうな笑顔が浮かんだ。

「軍議が始まるわよ？何をしてるの!」

シャロンは青年を引っ張り起こした。

「まったく・・・」

シャロンは自らの婚約者、王太子ルイ・アルトワをしげしげと眺め

た。

容姿ときたら申し分ないのだが、その情弱さゆえに国中の笑い者・

・

＜・・・その情弱者と結婚するのだから私も物好きね・・・＞

シャロンは自嘲気味に笑うと、青年・・・ルイをせかした。

「もうゼメキア教国軍は国境を越えた？」

「ええ・・・」

「そうか・・・もう避けられないんだね」

ルイの瞳に悲しみが浮かんだ。

「さあ・・・行くわよ？あなたにもしつかりしてもらわないと・・・
ね？」

シャロンは皮肉っぽくルイを振り返った。

「第1天魔王殿??」

そう言うときシャロンはさっさと歩き始めた。

第6天魔王

ミルディア国軍8万は国境付近に進撃するゼネキア教国軍9万を迎撃するため、国境に向けて進発した。

先鋒をつとめるのは第6天魔軍団長キーナ・カーンである。

ひととき目を引くのは彼女のミルディア人には珍しい浅黒い肌……

それもそのはず。

ゼメキア教国の侵攻にあい滅ぼされた北方の騎馬民族の数少ない生き残りが彼女である。

リチャードは難を逃れてきた彼女とその部族の生き残りを受け入れ、その騎馬技術を取り入れる先駆けとした。

そのためキーナが率いる第6天魔軍は彼女の出自である騎馬部族の特徴をそのままに残している。通常の騎兵と違い、身軽な鎧を身にまとい『騎射技術』に格段に優れている。

つまり騎兵と弓兵両方の特徴を兼ね備えている。

その軍団長に就任したのが22歳、そして今日に至る3年間第6天魔軍は押しも押されぬミルディアの主力部隊となっている。

そのキーナだが今朝は不機嫌そのものだった。

もうすぐ国境のサラミス平原に到着し、陣をかまえる準備を行うわけだが、心は晴れないままだった。

「なんでうちがお守りまでやらないあかんのや……」

キーナはいらだたくつぶやいた。

彼女の言葉には出自ゆえのなまりがまじるが彼女は気にも留めない。

「そうですな……足手まといは困りますな」

側近が追従するのを鼻で笑うとキーナは軍を止め、布陣の命令を下した。

すぐにリチャード率いる中軍がくる。いらいらしている暇もない・

その頃リチャード率いる中軍7万も国境付近に差し掛かっていた。

「坊ちゃん！」

馬をのんびりと進めるルイに一人の將軍が馬を寄せた。

「坊ちゃんはやめてくれよ、ウォレス……」

ルイは苦笑して振り返った。

第3天魔王ウォレス・ハート……彼は幼い頃のルイの養育係をつとめ、ルイに対しての敬意を唯一失わずにいるミルディアでは珍しい部類の人間だ。

戦に出れば『魔人』と恐れられるほどの武勇を発揮する彼も、ルイと話す時はまるで自分の息子と話すかのように相好を崩す。

「いよいよ初陣ですな、このウォレス嬉しゅうございますぞ。」

「面倒だけどね……」

ルイは肩をすくめて見せた。

「キーナさんの後ろに隠れておくよ」

「ははは……それが安全ですな」

ウォレスは大きく笑った。

「キーナ殿は気難しい方ですが、根はよい方です。ご心配なく」

「ああ……」

ルイは前方に見えてきた布陣を完了した第6天魔軍を見て目を細めた。

「ご挨拶してこようかな」

そういうとルイは馬腹をけって一人走り出した。

キーナの天幕をルイが訪れた時、キーナは一人でいた。

彼女の出陣の儀式である部族の戦闘の化粧である。

右目の周りに描かれた黒い模様・・・彼女自身のいつもの習慣だ。

「なんや・・・？」

キーナは自分の右目に目を奪われているルイを見てせせら笑った。

「そんなに物珍しいんか？王子にも化粧してあげましょうか？」

「いりません・・・」

即答したルイにキーナは少し驚いた。

「失った同胞を想ってあなたがするその化粧・・・僕なんかがする資格はありません」

「・・・」

自分の想いをそのまま表現したようなルイの言葉にキーナはまじまじとルイを見つめた。

「王子はこれが始めての戦やそうやね」

「はい」

「怖いかな？」

キーナの問いにルイは肩をすくめて見せた。

「ええ、まあ・・・ただあなたの軍にいたので心配はないと思っていますよ」

「ふん・・・他力本願か・・・」

キーナは毒づきながらも、ルイの落ち着きに内心驚いていた。

<・・・まあ足手まといには変わりないけどな・・・>

キーナはため息をつきルイを促し軍議に向かった・・・

開戦

軍議の席には上座にリチャード、そしてほとんどの天魔王たちがすでに一堂に会していた。

「遅れました・・・」

キーナがルイをせきたてながら入ってきて最後に着席するのを見てリチャードが重々しく口を開いた。

「これより軍議をはじめる」

リチャードはそう言うとうオレスを見やった。

ウオレスは頷くと戦況を説明し始めた。

「敵軍はアークス兄妹率いる9万・・・直属の兵がほとんどで精兵の集まりが今回出撃してきております。また第7天魔王からの報告ですと、教皇イカロス率いる教皇直属の騎士団約3万が先ほど合流したとのこと」

「教皇の親征つてことか・・・」

シャロンがつぶやいた。この事態が意味するのは今回のゼネギア教国の侵略は様子見などではなく明らかにミルディアの征圧を意図していると言つことだ。

「ルイ・・・」

リチャードが下座に座るルイを見やった。

「どう思う」

「・・・!!」

軍議にいたすべての天魔王たちが意外な顔をした。初陣の・・・しかも情弱な王子として有名なルイの意見をリチャードが一番に尋ねたことに心外な顔をした。

「恐れながら・・・」

その感情を露骨に吐露したのは第2天魔王カイゼル・レインフォートだった。シャロンと同じ孤児院から同じ時期にリチャードに見出された彼は、シャロンをも凌ぐ軍略と武勇を持つミルディア随一の名将である。

「王子はこのたびは初陣・・・意見をお聞きになられても時間の無駄かと」

「カイゼル！言葉を慎め！」

ウォレスがカイゼルを忌々しげににらみつけた。

「・・・・この平原はただっ広い荒野・・・」

キーナが地図を見ながら口を挟んだ。こんなくだらないことで軍議の方針がそれることが彼女が最も嫌うことだった。

「まずは第6天魔軍が一当たりし敵の出方を見るところでええかと思いますが？」

「うむ・・・・」

リチャードは重々しく頷いた。

「ただし・・・敵は比類なき名将アークス兄妹だ。深追いは禁物ぞ？念のため第4天魔軍を後詰につける」

「ゴロアですか・・・」

キーナの顔に苦笑いが浮かんだ。

第4天魔軍ゴロア・ドラムンドは猪突猛進と言う言葉がぴったり当てはまる将である。一騎打ちとなった場合の武勇はカイゼルにも引けをとらないが、作戦通りことを運べない短気な一面がありキーナとしては後詰が第4天魔軍であることは何の救いにもならなかった。

「何か不満か？なんなら俺が先鋒でもいいんだぞ？」

雲をつくような巨体をゆすりゴロアがあざ笑うようにキーナを見た。

「・・・・」

キーナはゴロアの挑発を無視して一礼すると立ち上がり天幕を出て行った。そのあとをルイがあわてて追う。

「・・・・」

シャロンは心配げにため息をついた。リチャードと言う強力な要が

なければ天魔王たちはこんなものだ・・・

出撃の合図の角笛が響き渡った。

「王子」

キーナがルイを振り返った。

「怖ければ中軍に下がってもええんですよ？」

「大丈夫ですよ。ご心配なく」

ルイの場違いともいえるにつこりとした笑顔にキーナは毒を抜かれたような気になった。

「まあええわ。とりあえずうちから離れんように」

キーナは彼女の武器である大きく湾曲した曲刀を抜き放ち叫んだ。

「突撃！！！」

大地を揺るがし第6天魔軍が突撃を開始した。

鋭い錐の陣形をとった第6天魔軍に対し、ゼメキア教国軍の前衛がさつと開き迎撃の体勢をとるのがわかる。

500歩の距離に迫った時、第6天魔軍の騎兵たちがなんと両手を手綱から外し鎧のみで馬を操りながら弓に矢をつがえた。

「放て！！」

キーナの号令のもと、第6天魔軍から放たれた矢が雨となってゼメキア教国軍前衛に降り注いだ。

『死の雨』と呼ばれるこの第6天魔軍の騎射攻撃は騎兵が敵に接触するまで数回繰り返される。

死の雨を浴び算を乱したゼメキア教国軍に突き刺さるように第6天魔軍が切り込んだ。

先頭を走るキーナは曲刀を舞わし次々とゼメキア騎兵をその餌食とした。

「・・・・・・・・」

ルイは辺りを見回した。

ゼメキア教国軍前衛はすでにキーナの軍に蹴散らされ算を乱して退却し始めている。

キーナの第6天魔軍がそれに追い討ちをかけようとしている。

「キーナさん！」

ルイが叫びキーナに馬を寄せた。

「敵が脆すぎます。戦意がなさすぎる・・・」

「確かに・・・」

キーナはあたりに目をやった。

後詰のはずのゴロア率いる第4天魔軍の動きが悪く微妙な間隙が生じている。

見る間にそこにゼメキア教国の一軍が割り込もうとしているのが分かる。

「ちっ！ゴロアのやつ！」

キーナは舌打ちすると退却命令を下そうと辺りを見回した。

包囲網を突き崩すのにつつつけの歩兵軍団がやけに目だって見えた。

「敵歩兵軍団にむけて突撃・・・！」

号令を下そうとしたその時、ゼメキア教国軍の投石がキーナの頭部に命中した。

「あっ・・・」

これにはたまらずキーナは馬上で気を失った。

「キーナさん・・・！」

ルイがあわててキーナを自分の馬に引き寄せた。

「ルイ様・・・！ご命令を！」

キーナの側近が慌てふためいて叫んだ。

「・・・・・・・・」

ルイはあたりを冷静に見回している。

「ルイ様！」

「逃げちゃおう・・・」

ルイはにつこりと笑った。

「みんなに伝えるんだ。太陽の方向に向かって突撃ってね」

「・・・・・・・・はっ！」

「・・・・・・・・」

戦況を遠望していたカイン・アークスは苦笑いした。

包囲した第6天魔軍が襲い掛かったのは、意図していた歩兵軍団ではなく教皇直属の重装槍兵団だった。重い装備に身を固めた槍兵たちは疾風のように包囲を突破する第6天魔軍に対してなすすべもなかった。

「教皇の余計な合流がなければ・・・・・・・・」

カインは舌打ちした。

「それにしてもキーナ・カーンにこれほどの冷静な判断力があるとは・・・歩兵軍団というえさに食いつかなかったとはな・・・」

カインは知らない。

この包囲網突破がミルディアでもっとも役に立たないと思われていた青年によってなされたことを。

・
こうして緒戦は双方痛みわけという形で幕を下ろすこととなった・

心

「・・・・・・・・!!」

キーナは気がついた。

あわてて体を起こすとそこはミルディア軍本営だった。

「お氣がつかれましたか！」

「退却・・・・できたんか・・・・」

キーナの言葉に側近は頷いた。

「ルイ様のご指示で」

「王子の・・・・!？」

キーナは目を見開いた。

「ルイ様の太陽に向かって退却と言う指示の元、我々はゼメキア教
国軍の包囲を突破しました」

「太陽の・・・・」

<・・・・・・・・そうか・・・・>

もしもあの時敵歩兵団に向けて突撃していたら・・・・

キーナはまだ投石をくらってずきずきと痛む頭を抑えた。

「王子は・・・・?」

「さあ・・・・退却が完了するところに行かれましたが」
「・・・・・・・・」

キーナは立ち上がるとひらりと馬にまたがった。

ほどなくキーナはルイを発見した。

本営から少し離れたところの小さな天幕でのんびりルイは本を読ん

でいた。

傍らには赤目の少女マリアが静かに座っている。

「大丈夫ですか？」

ルイは入ってきたキーナに気がつくにつこりと笑った。

「・・・あ・・・うん・・・」

キーナはあわてて頷いた。

「た・・・退却の指揮とつてくれたって・・・？」

「ああ、あれですか？」

ルイは肩をすくめて笑った。

「当てずっぽうで太陽に向かって逃げろって言ったらそれが正解だったみたいで・・・」

「当てずっぽう・・・」

キーナは首を振った。

「王子、うちはいろいろと退却時の様子を聞いたんや・・・あれは偶然の指示なんかやないことくらいうちはわかる」

「・・・」

ルイは静かにキーナを見やった。

その静かな優しい瞳にキーナは思わず目をそらした。

「な・・・なんで今回のこと手柄やっていないんです？口止めしはつたらしいやないですか・・・」

キーナは思わず声が上がっているを感じた。

「あれだけみんなに馬鹿にされてるのに・・・見返したくないんですか！？私やって王子のこと・・・」

「キーナさん」

ルイの静かな声がキーナの言葉をやさしくさえぎった。

「誰の手柄とか、誰のおかげとか・・・」

ルイはにつこりと笑って言った。

「そんなのどうでもいいじゃないですか。」

「どうでも・・・」

「戦争なんかもと意味のないものなんです・・・」

ルイは、ずっと目を細めていった。

そこに一気に現れた知性的な雰囲気には、キーナは言葉を失った。

「大事なのは自分の国の人たちが・・・できる限り死なずにすむこと。こんなくだらない戦争で」

「・・・王子・・・」

「だから僕は別に英雄なんかにならなくてもいいんです。情弱でどうしようもない王子のままで・・・」

ルイの笑顔を見て、キーナは胸を打たれた。

なんて邪心のない笑顔・・・

「王子・・・」

「はい？」

「惚れたで・・・！」

「は・・・？」

あつけにとられたルイを、キーナは思い切り抱きしめた。

「あ・・・ちよつと・・・キーナさん・・・！」

顔を真っ赤にして逃げようとするルイに、キーナは声を立てて笑った。

「これからはうちとうちの第6天魔軍は王子の味方や。何でも役に立てることがあったらいうてや」

そういうと、キーナはルイにつこりと笑いかけた。

その屈託のない笑顔に、ルイも笑顔でこたえた。

「はい・・・！」

「あ・・・ぼちぼち軍議が始まるで・・・いこつか・・・！」

キーナはルイの手をつかむと引きずるように歩き出した。

今まで彼女がルイに感じていたイライラはかけらもなくなっており、そこに芽生えた想いに、キーナ自身まだ戸惑いつつあった・・・

第7天魔王

「集まったようだな」

リチャードが重々しく口を開いた。

「キーナ……」

「はっ……！」

「ゼメキア軍と一当たりしたのはそなただ……どうだった？」

「は……」

キーナは言葉に詰まった。

<……言わないと……退却の成功は王子のおかげやって……>
意を決して顔を上げたキーナの手をルイが静かに押さえた。

「……！」

キーナは小さくため息をついた。

「おそらくは最初の一当たりは陽動。彼らの本意は先鋒の我らを包囲殲滅し先制打撃をあたえたかったものと思われます」

「さすがはキーナ……ようあの包囲から脱出したものよ」

ウォレスの言葉にキーナはいたたまれなくなつて俯いた。

「ふん……はじめの猪突猛進がなければそもそも包囲すらされておらぬわ」

ゴロアが悪意をこめてつぶやいた。思わず言い返そうとしたキーナよりも先に口を開いたのはルイだった。

「ゴロアさん……あなたの後詰にも問題があったように思いますけど」

「……！」

「第4天魔軍は本来第6天魔軍を追走しているはずがゼメキア軍が横入りできるくらいに間隔があいてた」

ルイはにっこりと笑つて言った。

「戦場って僕はよくわかりませんが、やむにやまれぬ理由があったんですよね？」

「う……うむ……」

黙り込んだゴロアをよそにルイは他の天魔王たちをみやった。

「第6天魔軍は無事に脱出した。敵の狙いもわかった。収穫は大きいですよ？」

「そのとおりだ……ルイ」

リチャードが静かに言った。

「ゴロア……よいな？」

「は……ははっ！！！」

「今後も引き続き先鋒は第6天魔軍でいく、キーナもそのつもりだな」

「はっ！」

リチャードの温かい言葉にキーナは感激してうなづいた。

「それにしても……」

リチャードは低くつぶやいた。

戦況は不利そのものだ。兵力差があるだけにこちらから攻勢にでられないのが痛かった。

その日の夜……

ルイは一人で天幕で本を読んでいる。

「ルイ……！」

天幕に訪れたのはシャロンだった。

「大丈夫だった！？怪我はしてないのよね？」
入ってくるなりシャロンはルイの体を調べた。

「いきなり敵に包囲されるだなんて……」

「大丈夫だよ。キーナさんがいたから僕は安全だったし」
ルイは肩をすくめて見せた。

「嬉しいな、心配してくれたのかい？シャロン」

「な・・・」

シャロンはあわてて立ちあがった。

「ベ・・・別に心配なんてしていないわ。 あなたはこの国の王子なんだから何かあると困るの」

「ふうん・・・」

ルイはくすりと笑った。

「ねえルイ・・・」

「ん？」

「あなたが退却の指揮をとったっていう噂が流れてるんだけど・・・」

シャロンの瞳がルイの目をまっすぐに見つめた。

「キーナは投石で気絶していてあなたがかわりに退却の指揮を執ったって・・・」

「シャロン」

ルイは静かにシャロンの言葉をさえぎった。

「ただの噂だよ。 戦場にそんな噂ってつきものなんだね。 びっくりしたよ・・・」

ルイの屈託のない笑顔を見てシャロンはため息をついた。

「そうね、そうよね・・・」

シャロンは小さくため息をつくるとルイの天幕をあとにした。

「・・・よかつたのですか？」

シャロンの出て行った天幕・・・

一人でいるはずのルイに小さな声がささやいた。

「ああ・・・戦場での手柄なんか意味もないから」

ルイは驚く様子もなく天幕の隅の隅に向かって話しかけた。

「それより・・・どうだった？」

「ルイ様の見られたとおり輜重隊はアークス兄妹の軍と教皇直属部隊は別々に存在しています。」

「・・・」

「しかも教皇直属部隊の輜重隊はアークス兄妹の軍を避けるように迂回して兵糧を運んでいます」

「そっか・・・やっぱりね。たぶん兵糧の中身も直属部隊は違うってことか・・・」

ルイの顔に笑みが浮かんだ。

「ご苦労様・・・マリア」

ルイの言葉に闇の中から浮き出るように赤い瞳の少女、マリアが現れた。

第7天魔王、マリア・レイ・・・

彼女の出自はなんとゼメキア教国である。

生まれてから教団に暗殺者として育てられたが、ゼメキア教で『不吉のしるし』とされる赤い瞳をもつ彼女は虐げられ続け、ついに教皇イカロスから国外追放となった身である。

しかしその後ウォレスの推挙で諜報部隊第7天魔軍の軍団長にとりたてられた。

「悪いけどこのこと、父上に知らせてきてくれ。父上ならこれを戦況の打開に使うはず・・・」

「ルイ様がおっしゃればいいのに・・・」

「マリア・・・」

ルイはそつとマリアの頭に手をのせて微笑んだ。

「私は悔しいです。カイゼル様なんかいつもルイ様を馬鹿にして・・・」

「」

「優しいねマリアは」

「・・・」

マリアはため息をついた。

「ルイ様のご命令なら仕方ありません。リチャード様にお知らせします・・・」

「頼むよ」

マリアは音もなく闇の中に消えていった。

「終わらせなきゃ・・・一刻も早く・・・」
そうつぶやいたルイの瞳は憂いに満ちていた・・・

策略

ロンウェーという男がいる・・・

ゼネキア教国の中でも教皇の信頼の厚い直属軍の一員である。
今彼は一軍を率い、教皇の本営に向けて進軍中である。

「もう少しだ！気を緩めるな！」

部下に号令しつつロンウェーはもう何度目になるため息をついた。
<・・・まったく・・・大將軍の部隊に気づかれぬように兵糧を運
べなどと・・・>

彼は自らが率いる輜重隊を見やった。

およそ戦地の糧食とは似つかわしくない豪華な食べ物や飲み物・・・

・
それらは極秘扱いで教皇の直属軍にのみ届けられる。

<・・・同じ神の兵であるはずなのに・・・>

ロンウェーは頭にこびりついて離れない疑問をかぶりをふって追い
払った。

考えても仕方ない。

教皇の言うことに従わなければこの国にすることはできない。

「・・・・・・・・！」

突然ロンウェーは右手を上げて進軍を止めた。

彼の歴戦の将としての感覚が異変を感じ取った。

「敵襲だ！迎撃用意！！」

彼が叫ぶと同時に彼の部隊に矢の雨が降り注いだ。

「・・・・・・・・これは！」

ロンウェーは次々と正確な斉射で倒れていく味方の兵をみて愕然とした。

<・・・これはミルディアの第6天魔軍の死の雨!・・・>

待ち伏せを悟ったロンウェーの兵に、ミルディアの第6天魔軍が襲い掛かった。

「くっ!」

一瞬にして不利を悟ったロンウェーは傍らの兵に叫んだ。

「大將軍の陣にかけこみ援軍を要請しろ!」

「し・・・しかし!」

「この有事に些細なことは気にするな!行け!」

「はっ!」

ロンウェーは伝令兵を逃がすとミルディア軍を迎撃に向かった。

輜重隊の警護兵約五千に対しミルディアの第6天魔軍も伏兵行動だったためほぼ同数。

しかし不意をついた兵とつかれた兵との士気の差は歴然としていた。

<・・・かくなる上は主将を討つしか・・・>

ロンウェーは血眼になって敵兵の主将であるキーナをさがした。

と・・・そのロンウェーの前に複数の警護兵に守られたミルディアの將軍らしき青年が現れた。

これはルイだったのだが、ロンウェーはルイのことをキーナの副将と勘違いした。

無理はない、ルイ自身がそれほど他国に知られていなかったのだから・・・

無言で襲い掛かってきたロンウェーに、ルイを警護していた兵たちはあわてて立ちふさがろうとした。

だがその勢いは凄まじく、あっという間に数名のミルディア兵がロンウエーの槍の餌食となった。

「・・・・・・・・！」

警護兵がひるんだ瞬間を見逃さず、ロンウエーはルイに襲い掛かった。

キーン・・・・・・・・！

怪鳥のような耳に響く音を立てロンウエーの槍の穂先部分が宙高く舞った。

「・・・・・・・・！！？」

まっぶたつになった槍を呆然と見つめるロンウエーを第6天魔軍の兵たちがよつてたかつて馬から引き摺り下ろした。

「殺さないで・・・」

ルイの声に兵たちはおとなしく従い、ロンウエーに縄をかけた。

<・・・・・・・・見えなかった・・・斬撃がまったく・・・・・・・・>

ロンウエーは呆然としたまま捕虜となった。

「すごいやん！王子めちやめちや速いやん！」

キーナが目を丸くして言った。

「・・・・・・・・ええ・・・まあ」

「ええまあじゃないで！？カイゼルなんかより強いやん、王子！」

「・・・・・・・・好きじゃないんです」

「え？」

「人を殺す力を褒められるのって・・・」

ルイは肩をすくめて困ったように笑うと周りを見やった。

「大勢は決しましたね」

「そうやね・・・糧食をぶんどって帰ろうか」

「いえ・・・・・・・・」

ルイはゆっくりかぶりをふった。

「このまま・・・」

「なんで？この糧食をおいていくんか？」

「この糧食を大將軍の兵に見せるんです。そうすることで内部亀裂が起こる・・・」

「なるほどな・・・」

キーナはルイの冷静な判断に舌を巻いた。

確かにこの贅沢極まりない糧食を見た大將軍の兵の間には教皇直属軍への不満が一気に高まることだろう。特にここは戦地だ。食の差別はもつともあつてはならないこと・・・

もともとこの攻撃を進言したのは第7天魔王マリアだと聞いているが、キーナは確信した。

ルイだ・・・この青年の冷静な判断・・・

この襲撃を考えた人間しかありえない。

「わからん人やね・・・」

キーナはルイを見てため息をついた。この人には欲がないのだろうか・・・

「あとは盛大に火の手を揚げましょう。糧食の一部を豪快に燃やして大將軍の兵からも見えるように」

「うん・・・」

キーナはくすりと笑うとルイの指示に頷いた。

いつの間にか第6天魔王の自分が、国中が馬鹿にする王子の命令を素直に聞いている・・・

悪い気分ではない自分がキーナは少しおかしかった・・・

想い

もくもくと立ち込める煙の中、カイン・アークスは苦々しげに打ち捨てられた糧食の山を見やった。

「これが兵糧か・・・」

カインは小さくため息をついた。

<・・・くだらぬことをしてくれたものよ・・・>

教皇直属軍だけが豪華な兵糧を支給されていたことを全員が知れば一気に内部亀裂が起こる。

「誰にせよ味な真似をする・・・」

カインは輜重隊の生き残りの兵を探させた。

ほどなく生き残った一人の兵がカインの前に引き据えられた。

カイン直属の兵たちはすでに殺気立っているため、輜重隊の生き残りの兵は蒼白になってぶるぶると震えている。

「おびえるな。お前は同胞だ。殺しはしない・・・」

カインの言葉に生き残りの兵は震えながら頷いた。

「何があつた？」

「は・・・はい・・・私たちは本国から教皇様の命令で糧食を運んできておりました」

「それで敵兵の襲撃にあつたのだな？」

「はい、ミルディア軍の第6天魔軍でした・・・あれは・・・」

「そうか・・・またキーナ・カーンか・・・」

カインはため息をついた。

「それで？お前の主将はどうした？キーナに殺されたのか？」

「いえ・・・ロンウェー様は副将と思しき若い將軍と一騎打ちをされ生け捕られました」

「若い將軍？あのロンウェーを生け捕りにしたのか？」

カインは少し驚いて言った。

・
ロンウエーの武勇は簡単に生け捕られるようなものではないはず・

「何者かはわかりませんが、一瞬でロンウエー様の槍を両断したあの剣さばきは只者では・・・」

「・・・・・・」

カインは首をかしげた。

第2天魔王のカイゼルを思い浮かべたが、すぐにそれはありえないことだとわかった。

カイゼルであれば第6天魔軍の指揮下にいるはずがないし、なにによりこの兵にもわからないはずではない。

「何者だ・・・・」

カインはいぶかしげにつぶやいた・・・

同じころ・・・

勝利に士気の上がるミルディア軍の天幕で・・・

ルイとキーナは天幕から少し離れた小高い丘にいた。

「なんでや？ロンウエーを生け捕ったのは王子なんやで？」

「はい・・・・」

「それをうちの手柄にしようやなんて・・・・！」

キーナは苛立たしげに髪をかきむしった。

「今度ばかりはそうはいかんよ？たくさんの兵が見てたんや！」

「・・・・・・ですよね・・・困ったなあ・・・」

ルイはため息をついた。

「僕を守ろうとしてくれた護衛の兵たちが殺されたから仕方がなかったんです」

「王子・・・・・・！」

キーナはルイの肩をつかんだ。

「ずっと・・・・馬鹿にされてたんですよ？見返したろうと思わん

のですか!？」

「僕は……」

ルイは静かに微笑んだ。

「ただ……自分のそばにいる人たちを守りたい。ただそれだけです……」

「王子……」

「この戦で死ぬこの国の兵たちを少しでも減らせられたら……ルイは悲しげにつぶやいた。

そこにはあの暗愚な雰囲気はなく、彼の全身に研ぎ澄まされた知性の光が満ちていて、それをキーナは肌で感じ取った。

「王子は優しいね……」

キーナはそつとルイの肩に手を置いた。

「そんな王子、うちは好きやで……?」

「え……!？」

一瞬で赤面したルイを見てキーナは朗らかに笑った。

「さあ……捕虜のロンウエーの処遇を決める軍議があるで?いくで?」

そういうとキーナはルイを引っ張って歩き出した。

天幕に居並ぶ天魔王たちの中央にロンウエーが引き据えられている。入ってきたキーナとルイをみてロンウエーがいきなり叫んだ。

「お主……何者だ?」

「……」

一瞬で天魔王たちが静まり返った。

ロンウエーの視線の先には困った顔のルイがいた。

「あの剣さばき……俺はあれほど速い剣を見たことがない……」

「そ……それほどでもないですよ?」

ルイのどもった返事にキーナがくすりと笑った。

だが他の天魔王たちはわけがわからず啞然としている。

「軍議を始める……!ロンウエー殿には発言を慎まれるよう」

ウオレスが場を静め、ルイは安堵のため息をついた。

「リチャード様は遅れて見えられる。われらだけで先に軍議を始めよとの仰せだ。」

ウオレスはそういうと全員を見やった。

「まずはこれなる捕虜ロウンウェー將軍の処遇についてだが・・・」

「決まっておる！見せしめに首をはねてやるのだ！」

第4天魔王ゴロアが叫んだ。

「無法な侵略者がどうなるかをやつらに見せ付けてやるのだ！」

「俺も賛成だ・・・それによってわが軍の士気も上がるというもの」

カイゼルも同調したことで、場の雰囲気は殺伐としたものになり始めた。

「シャロン殿は・・・？」

ウオレスの言葉にシャロンは頷いた。

「私も同感ね・・・兵の士気をあげるには上策だわ・・・」

「キーナは？」

「うちは・・・」

キーナは賛成・・・と言いかけて思いとどまった。

ルイは・・・？彼女の言葉をとめたのはその想いだった。

「・・・」

ルイに視線を泳がせたキーナを見てシャロンが首をかしげた。

「僕は反対です・・・」

ルイが沈黙を破った。

「誰もあなたの意見など・・・」

言葉をかぶせようとしたカイゼルの目をルイは真っ向から見据えた。

「ここでこの人を殺したら僕たちも同じだと思わないのかい？」

「・・・？」

「この人はこのまま解放したい・・・」

ルイの言葉に処刑派の天魔王たちが一気に反対の言葉をまくしたてた。

シャロンを除いて……

「キーナさん……」

困ったように自分を見るルイにキーナはため息をついた。

「こいつは生き証人なんや……!」

キーナの声は戦場でもその独特な響きゆえによく届く。

その声でキーナが叫んだため天魔王たちは一気に静まり返った。

キーナはロンウェーが運んでいた糧食が教皇直属兵用の豪華なものだったこと、それを大將軍の部隊は知らなかったこと。

そして糧食を奪わずにあえておいて来たこと、すべてを話した。

「要するにあえて大將軍の陣営に返すことで内部瓦解を狙うということか……」

ウォレスが頷きながら言った。

「大体考えは出揃ったようだな……」

リチャードの声に天魔王たちはいつせいに跪いた。

「ルイとキーナの意見に従い、捕虜は解放する。手出しは無用だ……よいな?」

リチャードの言葉が重々しく天魔王たちの上に響いた……

「……」

解放されて戻っていくロンウェーの姿を小高い丘からルイが静かに見守っている。

「ルイ……」

シャロンがルイの後ろから声をかけた。

「やあ……シャロン」

ルイがにつこりと笑って振り向くが、シャロンの表情は硬かった。

「ねえ．．．どうして今まで黙ってたの？」

「なにを．．．？」

「あなたは剣も使えたし、軍略だって長けていたのに．．．」

「．．．．．」

「それを言ってくれてれば．．．」

「言ってくれてれば．．．何？」

ルイの言葉にシャロンははっとした。

ルイの瞳に浮かんでいたのは悲しみだった。

「剣を使えても使えなくても．．．兵を動かしても動かさなくても．．．」

ルイは悲しげに俯いた。

「僕は僕だよ．．．」

そういうとルイはシャロンを残して去っていった。

「あ．．．」

シャロンは小さくため息をついた。

<．．．何を言いたかったんだろう私．．．>

シャロンは遠くゼメキア軍の陣地を見やった。

「早く終わればいいな．．．こんな戦．．．」

シャロンの呟きが夕暮れの丘に静かに消えていった．．．

敗北

「どういことですか？教皇猊下・・・」

ゼメキア教国軍本営で・・・

大將軍カインが中央にたたずんでいる。

上座には教皇イカロスが座っているが、カインはあえて跪いてもいない。

「ロンウェーに輜重隊を指揮させたのは猊下だという話を聞いたのですが・・・」

「な・・・なにを・・・」

イカロスが露骨に動揺するのを見てカインは冷笑した。

「ロンウェーが戻ってきたのですよ。ミルディア軍に解放されました」

カインが合図をすると天幕の中にうなだれたロンウェーが入ってきた。

「すべて事情は聞きました・・・」

カインの鋭い視線にイカロスはぶるりと身を震わせた。

「今度はこのようなことはお慎みください・・・猊下の直属軍も私の兵もみな神の兵・・・」

「わ・・・わかっておる・・・」

「そう願います・・・」

そついい残すとカインはロンウェーを促し天幕を出ていった。

「・・・」

残されたイカロスはわなわなと震えだした。

神経質に爪をかみながらイカロスはつぶやいた・・・

「今に見ておれ．．．最高権力者は余だ．．．お前ではない．．．！」

「ロンウェー」

「はっ．．．」

天幕を出たロンウェーにカインが声をかけた。

びくりと身を震わせたロンウェーにカインは微笑みかけた。

「よくすべてを話してくれた。これからは教皇軍には居づらからう。俺の指揮下にいるといい」

「はっ．．．！」

カインの配慮にロンウェーは感激して跪いた。

「時にロンウェー．．．お前を生け捕りにした男のことだが．．．」

「私も驚きました．．．あれほどの剣の使い手．．．しかもその正体は．．．」

ロンウェーの言葉にカインは頷いた。

「まさに伏竜といったところか．．．ルイ・アルトワ．．．」

カインは、ずっと目を細めてつぶやいた。

「兄上！」

カインの下にレオナが馬を走らせてきた。

「ずいぶんと士気が落ちているわ．．．」

「うむ．．．」

「私が次は出陣する．．．良いわよね？」

レオナの言葉にカインは頷いた。

「お前が出るからには戦果は期待していいんだろうな．．．？」

「もちろんよ。天魔王の一人くらい討てるといいんだけど．．．」

事も無げに言くとレオナは艶然と笑みを浮かべた。

「油断はするな。特にルイ・アルトワという男には気をつける」

「お前を生け捕りにした男か．．．？」

レオナはうなだれるロンウェーに視線を投げた。

「信心が足りぬからよ．．．私には神がついている。異教徒などに遅れはとらない．．．」

「もういい、レオナ」

カインが苦々しげに言った。

「攻撃は今夜．．．下がった士気を再度あげるため急ぐぞ。よいな？」

「まかせて」

馬腹をけって走り去るレオナを見送りながらカインは小さくため息をついた。

その夜．．．

ミルディア軍陣営の隅の天幕．．．

ルイがぼんやりと天幕の隅の闇を見つめている。

「シャロンには知られたくなかったな．．．」

突然ルイがぼつりとつぶやいた。すると闇の中からマリアが姿を現した。

「どんなに気配を絶つてもルイ様にはばれてしまいますね．．．」

マリアの言葉にルイはにつこりと笑った。

「マリアの気配はわかるよ。なんていうのかな．．．僕を心配してくれる気配がするんだ」

「マリアはいつもルイ様を心配していますから．．．」

マリアも思わず笑う。

「それよりルイ様．．．シャロン様には知られたくなかったって．．．？」

「ああ．．．」

ルイは大きくため息をついた。

「シャロンはああいう生い立ちだから、どうしても自分を守ってくれる強さに惹かれるんだ．．．」

「だったらルイ様なら．．．」

「違うんだマリア・・・」

ルイは優しくマリアの頭に手を乗せ、髪をなでた。

「僕はシャロンには僕自身を見てほしいんだ・・・」

「ルイ様・・・」

マリアはしばらく考えてにつこり笑った。

「もう一度お話されてきては？ルイ様のお心をお話すればきっとわかってくださいます」

「そうかな・・・ちよつと喧嘩気味になったからちよつと良いかもね・・・」

そういうとルイは立ち上がった。

同じころ・・・

シャロンは天幕の外に佇み、星空を眺めていた。

ルイの悲しげな瞳・・・考えるときりきりと胸が痛んだ。

「そうよね・・・ルイにはルイのいいところがあるんだから・・・」
小さくつぶやくとシャロンは天幕に戻った。もう一度ルイの顔が見たかった。

「・・・あ・・・」

天幕の中に人が居るのを見てシャロンは少し驚いた。

「ルイ・・・？」

「シャロン・・・」

天幕の中に居たのは第2天魔王カイゼルだった。

「どうしたの？こんな時間に・・・」

カイゼルに語りかけるシャロンの言葉は屈託がない。

彼女にとってみれば、孤児院から一緒に育ったカイゼルは兄妹のようなものだった。

「今日の軍議・・・ロンウエーの釈放をどう思う？」

カイゼルの問いにシャロンは首をかしげた。

「どう思ふもなにも・・・リチャード様が解放と決めたのよ？」

「ああ、だがその前にあいつが論を動かした、俺は気に食わない」
「・・・・・・・・・・」

カイゼルは悪意に満ちた嘲笑を浮かべた。

「少しは剣が使えたらいいな。まあロンウエーごとき俺やお前でも十分生け捕りにできるがな」

「・・・・・・・・カイゼル・・・・・・・・？」

「わかるだろう？あいつは強くないんだ・・・・・・・・」

うわごとのようにつぶやきカイゼルはいきなり立ち上がりシャロンを抱きすくめた。

「ちよっ・・・何するのよ!？」

「俺のほうがあいつより強い!」

「カイゼル・・・・・・・・!」

「お前を守るのは俺だけだ!」

「・・・・・・・・!!」

その言葉にシャロンの力が一瞬緩んだ。

「俺のものになれ・・・・・・・・」

ガタン・・・・・・・・!

後ろで物音がしてシャロンとカイゼルは振り返った。

そこにたっていたのはルイだった。

「・・・・・・・・・・」

「ル・・・・・・・・ルイ・・・・・・・・!」

慌ててルイに歩み寄ろうとしたシャロンだったが、その前にルイは天幕を駆け出していった。

「待って!」

「ほっておけ・・・・・・・・!」

「離して!!」

シャロンは彼女の腕をつかんだカイゼルを振りほどいた。

絶句したカイゼルを残し、シャロンはルイを追って外へ駆け出して

いった。

「・・・・・・・・」

天幕から少し離れた小高い丘にルイはいた。

「ルイ・・・・・・・・」

ルイに歩み寄ろうとしてシャロンは足元に落ちている花に気がついた。

シャロンの好きなミスクの花だった。

「聞いて・・・・・・・・？ルイ・・・・」

「いいんだ・・・・・・・・」

ルイの乾いた声にシャロンの体がすくんだ。

「君は・・・・カイゼルの強さに惹かれるんだね・・・・」

「違・・・・・・・・」

シャロンが言いかけたその時、ルイの剣が走った。

「・・・・・・・・!!」

自分の喉先にぴたりと止まった剣先にシャロンは息を呑んだ。

<・・・・・・・・見えなかった・・・・剣筋が・・・・>

この時シャロンは初めてルイの本当の剣の力量を知った。

「こんなむなしなものに惹かれるのか・・・・？人を傷つけるだけの力に！」

ルイの目に涙があふれているのに気づき、シャロンは言葉を失った。

「婚約も・・・・君が解消したければそれでいいよ・・・・」

そうつぶやくとルイはシャロンを残し去っていった。

「・・・・・・・・」

呆然と佇むシャロンの耳に突如、兵の喚声と剣の響きが聞こえてきた。

「・・・・・・・・!!」

「申し上げます！」

伝令がシャロンの前にひざまずいた。

「敵の夜襲です！敵兵は2万ほど、総大将はレオナ・アークスです！」

「わ……わかった……」

「今第3、第4天魔軍が迎撃に当たっております。シャロン様にもすぐにご出陣を！」

シャロンは頭をひとつ振ると駆け出した。

ミルディア兵たちが次々と鮮血をほとばしらせ倒れていく。

その死体の輪の中央に居るのはレオナ・アークスだ。

彼女は鎧のみで馬を操り、2本の鉄鞭を両手に縦横無尽にミルディア兵を蹴散らしていた。

彼女の鉄鞭はミルディア兵の鎧ごと肉を引き裂き、ミルディア兵を恐怖に陥れた。

「ぬう……！俺が相手だ！」

巨大な戦斧を振りかざし第4天魔王ゴロアがレオナの前に立ちふさがった。

「お前……天魔王の一人か……？」

レオナの美しい顔に凄絶な笑みが浮かんだ。

「異教徒よ……私の手でせめて魂を浄化してやろう……」

「やれるものならやって……」

そう叫びかけた次の瞬間、ゴロアは焼けつくような痛みを両腕に感じた。

「ぐ……おお」

ドスン……と音を立て地面に落ちた戦斧を握った自分の両腕を信じられない思いでゴロアは見つめた。

「死ね……！」

レオナの鉄鞭が一閃しゴロアの首をその胴体から跳ね飛ばした。それを見た第4天魔軍は恐慌をきたし一気に総崩れとなった。

「なんてやつや・・・ゴロアを簡単に殺しよった・・・」

出動準備が整った第6天魔軍にキーナは号令を下しつつ身震いした。

「王子は・・・？見つかったか？」

「いえ・・・！探しておりますが・・・」

「そうか・・・」

<・・・情けない・・・>

キーナは自嘲した。こんな時にルイがいれば・・・そう思ってしまう自分が情けなかった。

「いくで！ウォレスの第3天魔軍を援護する！」

キーナは叫び馬腹を蹴った。

「引くな！踏みとどまるのだ！」

ウォレスは声をからし叫んだ。

しかし剛勇を誇っていたゴロアが一撃で殺されたのを見たミルディア兵の恐慌はウォレスをもつてしても収まらなかった。

「ちっ！！」

ウォレスは目の前に死神のごとく現れたレオナを見て舌打ちした。

「お前にも魂の浄化が必要だな・・・」

「・・・！！」

ウォレスは槍を風車のごとくまわしレオナに打ちかかった。

<・・・あの鞭の変則的な動きに惑わされてはならぬ・・・>

さすがにウォレスは冷静にレオナの鉄鞭の動きに対処した。

しかし力量の差は歴然としていた。

「ぐあ・・・！」

レオナの鉄鞭がウォレスの右足を深くえぐりたまらずウォレスは落馬した。

「・・・・・・」

とどめを刺そうとしたレオナだったがその手を止めた。

<・・・そつだ・・・こいつを公開処刑すればさらに士気が上がるか・・・>

「ひっ捕らえよ！」

レオナの命令でゼメキア兵が一斉に襲い掛かりウォレスを捕縛した。

「戦果は十分ね……」

レオナは満足げな笑みを浮かべた。

天魔王の一人を倒し、一人を生け捕りにした……これ以上の戦果はない。

レオナの合図の元、彼女の直属兵2万は鮮やかな動きで撤退を始めた。

「あかん……！ウォレスが……」

キーナは判断を迷った。ここで追撃してもレオナの前では無駄な犠牲がさらに増える……

「……！」

歩みが止まった彼女の横を疾風のようにルイが駆け抜けた。

「ウォレス……！！」

悲痛な叫びとともにルイはたった一騎でゼメキア兵に斬り込んだ。ゼメキア兵を次々と手にながらルイは、引き立てられていくウォレスを追いかけてようとしたがゼメキア兵の厚い壁に阻まれて距離は遠のくばかりだった。

「ウォレス！だめだ……！ウォレス……！！」

「王子！あかん！これ以上深追いするのは無理や！」

キーナがルイを抱きとめなかったら、おそらくルイは追撃をやめず戦死していたかもしれない。

「離して下さい！ウォレスが……！！」

「王子……！」

暴れるルイを向き直らせキーナはルイの頬をたたいた。

「しっかりしてください……ここで追いかけてもウォレスを取

り戻したりできへん！」

「でも……」

「死人が増えるだけや。それは王子が一番望まんことやる!？」

キーナの言葉にルイは呆然として退却していくレオナの軍を見送っていた……

決意

ミルディア軍の動揺は相当なものだった。

無理もない、最強を誇った天魔王の一人があつという間に殺され、さらに一人が兵たちの目の前で生け捕られ連行されていたのだから・・・

リチャードの天幕にすべての天魔王が集まっている・・・
ルイ一人を除いて・・・

「マリア・・・ウォレスの様子は確認できたか？」

リチャードの問いにマリアが進み出た。

「はい・・・ゼメキア軍はウォレス様を公開処刑するつもりです。彼らの話すところによると予定は2日後の早朝・・・」

「そうか・・・」

リチャードは小さくため息をついた。

「敵はまたかさにかかって攻め寄せてくるだろう。油断するな・・・」

「

「ウォレスの奪還は・・・」

シャロンの問いにリチャードはかぶりを振った。

「だめだ・・・犠牲が大きすぎる」

「しかしわが君・・・ウォレスはこの国に・・・」

「言うな・・・」

リチャードが静かにしかし重々しくシャロンの言葉をさえぎった。

「ウォレスはわが戦友だ・・・しかしそれとこれとは違う。今戦つても兵の動揺が大きすぎる。お前とておびえる兵を率いて敵とは戦えまい？」

「・・・」

シャロンは言葉に詰まってうつむいた。

同じ頃……

ゼメキア軍の陣営内獄中……

「第3天魔王ウォレス……」

鎖につながれたウォレスの前にカインが佇んでいる。

レオナから受けた足の傷は手当もされず血が流れ続けている。

「不覚を取ったものだ……」

「……」

ウォレスは静かに目を開きカインを見た。

「どうだ？その武勇、知略……捨てるには惜しい。改宗すると言
う名目で俺の部下にならぬか？」

「……」

「俺は異教徒だろうが有能な人間をあたら殺させるのを惜しく思う」
リチャードの言葉にウォレスはわずかに笑みを浮かべた。

「光栄なことだ……カイン・アークスにそれほど認められるとは
な……」

「……」

「だが、俺はある方に忠誠を誓った身だ。その方を裏切ることとはで
きない……」

「リチャード・アルトワか？」

「もちろんリチャード様には忠誠を誓っている。だが俺の言ってい
るのは違う方だ……」

「……？」

カインはわずかに首をかしげた。

「おぬしもいずれその目で見ることになるだろう……あの方の本
当の力を」

ウォレスは小さくつぶやくと苦しげに目を閉じた。

「……」

カインは立ち上がると獄卒に合図をした。

「足の傷の手当をしておけ」

「はっ……しかしこやつは異教徒ですぞ？」

「2日後に処刑する前に死ぬぞ？公開処刑の意味は知っているだろう、お前でも？」

カインの有無を言わさぬ眼光に獄卒は震え上がり頷いた……

一方……

「よくやった！レオナ・アークスよ！そなたは神の兵を率い見事な戦果を挙げた！」

甲高い教皇イカロスの声が天幕中に響いていた。

「はっ……！神の加護があつたまでのことと思っております。」

レオナの言葉にイカロスは満足げに頷いた。

「おぬしの信心の深さは頼りにしておる。神の威光を示すにおぬしのような者があるとわしも心強いぞ」

「はっ！」

拝礼するレオナにイカロスは有頂天に言葉を続けた。

「時にレオナよ」

「はい」

「ミルディア軍はまだ動揺から抜けきつてはおらぬはず。明日の昼もう一度攻撃をかけるのじゃ。そして天魔王とぬかす異教徒の頭目をまたひとつらえてまいれ……！」

「……」

レオナはわずかにためらった。

ミルディア軍とて烏合の衆ではない。もう一度攻撃をかけたところで昨日のような成果はあげられないことくらいレオナとてわかつていた。

「どうした……？」

イカロスは神経質に爪をかで言葉を重ねた。

「おぬしの信心を神が試されておるぞ？」

「…………はっ！すぐに準備に取り掛かります！」
『神』という言葉にレオナははじかれたように答えた。敬虔なゼメ
キア教徒である彼女にとってその言葉は絶対だった。

そのころミルディア軍本営では……

ルイが足早にリチャードの本営に向かっていった。

眠ってもいないらしく、目が血走り顔も血の気が引いている。

「ルイ…………！」

ルイの目の前にシャロンが立った。ルイが悲しげに目を伏せるのを
見てシャロンは胸が詰まりそうだった。

「お願い、話を聞いて…………」

「今は…………忙しいんだ…………」

ルイはかすれた声でつぶやくと、シャロンをつきのけ歩き出した。

「ルイ…………！」

「僕は信じてたんだ…………」

ルイは足を止めてつぶやいた。

「君だけは…………僕自身を見てくれているって…………」

「見て…………！私はあなたを見て…………！」

「じゃあなんで…………！」

ルイが血の出るような声で叫んだ。

「もういい…………聞きたくない…………」

ルイはたちつくすシャロンをおいて再び歩き出した。

その二人の様子を遠くからキーナが見守っていた。

「……………なんや……………そういうことか…………」

キーナは目を閉じたため息をついた…………

「なんのようだ…………」

天幕に一人入ってきたルイを見てリチャードは静かに言葉をかけた。

「お願いがあります」

ルイの瞳には尋常ではない光が宿っていた。

「僕に第1天魔軍と、ゴロアさんがいなくなつた第4天魔軍、そしてウォレスの第3天魔軍の指揮をさせてください・・・」

「仮にそれを許可したとして・・・」

リチャードは苦々しげに言った。

「どうしようというのだ・・・？」

「ゼメキア軍を壊滅させます。ウォレスを奪還する・・・！」

ルイの答えは単純だった。それだけにそこに秘められた血の出るような思いをリチャードは十分感じ取った。

「ルイ・・・」

ルイを見つめるリチャードの目は父親そのものだった。

「お前ならば・・・おそらくそれを成し遂げるだろう。」

「・・・では・・・？」

「勘違いするな」

リチャードの厳しい言葉にルイはびくりと体を震わせた。

「仮にウォレスを奪還できたとして・・・いや、お前ならできると思う。しかしどれだけの兵が死ぬことになる・・・」

「・・・」

「お前のその力・・・お前はこの国の大切な人たちを守るためにけに使用いたい・・・お前のその言葉を信じたからこそ私はお前を国事には今まで交えることをしなかった」

「・・・」

「だがお前の言う大切な人を守るとは、一人の人間を守るためにこの国の民である兵たちを多数死なせることなのか・・・？」

「でも・・・ウォレスがこのままじゃ・・・」

ルイはうなだれた。

「ウォレスは僕自身を見てくれてた。ウォレスはいつだって僕の味方だったし支えにもなってくれた・・・そんな彼を見捨てることは・・・」

「愚か者……」

リチャードは静かにルイの言葉をさえぎった。

「誰がウォレスを見捨ててと言った……」

「……?」

「お前の狙い通り今教皇とアークス兄妹の間には大きな溝ができて
いる。いや……厳密には教皇とリチャード・アークスだ。」

「……」

ルイのいぶかしげな顔にリチャードは苦笑した。

「まだわからぬか……レオナ・アークスは敬虔な……というよ
り盲目的にゼメキア教を信じている。そのレオナは教皇にとっては
便利な駒になる。輜重隊の一件で恥をかいた教皇は必ずもう一成果
あげたくてレオナに出撃の命令を出すはず。ウォレスの処刑前にな
……」

「……!」

「捕虜を奪還する手段はなにも力攻めだけではない。仮にこちらも
向こうの重要人物を押さえた場合は簡単に成立する……奪還では
なく交換というかたちでな……」

ルイははじかれたように顔を上げた。

「これはお前でしかなしえぬ手段と知れ……」

「はい……父上……」

「そしてそれ以後お前の能力はすべての人間が知るところとなる……
」

リチャードはまっすぐルイを見据えた。

「これからは情弱者の仮面を捨てなくてはならぬ。その覚悟がある
か?」

「ウォレスの命にはかえられません……」

ルイは立ち上がった。その目は普段のルイそのものに戻っていた。

「父上……」

天幕を出て行き際にルイはリチャードに微笑みかけた。

「今までの親不孝……お許しください。そして今のお言葉……」

感謝いたします」

「ゆけ・・・迎撃の指揮は任せる。第6天魔軍がよかるう？」

「はい・・・」

笑顔で出て行った息子をリチャードは優しい目で見送った。

「・・・ごほっ・・・」

リチャードは小さく咳き込み口元を手でぬぐった。

「頼むぞ・・・」

手についた血糊をマントの裾でぬぐいながらリチャードはつぶやいた。

集まった天魔王たちはいぶかしげな顔でルイを見つめていた。

リチャードの命令とので集まった彼らを待っていたのはルイだった。

「今日・・・おそらくまたレオナ・アークスが攻めてきます」

「・・・！！」

ざわめく天魔王たちにルイがさらに言葉を重ねた。

「迎撃の指揮は僕が取ります。この件は父上からも承認を得ています・・・」

「馬鹿な・・・！」

第2天魔王カイゼルがせせら笑った。

「あなたの指揮？冗談はほどほどにしてください・・・」

「カイゼル・・・！」

シャロンがカイゼルの言葉をさえぎった。

「作戦を・・・聞いてからでも反対するのは遅くないわ・・・」

カイゼルはじろりとシャロンを見て口をつぐんだ。

「迎撃は第6天魔軍のみ。ゴロアさんの第4天魔軍、ウォレスの第3天魔軍は・・・」

ルイはシャロンを見た。

「君が指揮するんだ。ただ敵との交戦はしないこと。父上の本営を守ってくれればいい・・・」

「俺はどうしろと・・・？」

カイゼルの挑戦的な言葉にルイは静かに答えた。

「第2天魔軍は伏兵として戦闘行動には参加しないでもらいます。」

万が一レオナ・アークスを第6天魔軍が取り逃がした場合のみ退路を断ち、彼女を生け捕りにしてもらいたい・・・」

「ルイ・・・わかるように説明して？第6天魔軍でレオナを生け捕りにしようとしているの？どうやって・・・？」

「簡単なことだよ、シャロン」

ルイはこともなげに言った。

「僕が生け捕りにする。万が一逃げられた時には保険としてカイゼルにお願ひしたいと思う。」

「保険だと・・・！？」

カイゼルが苛立たしげに叫んだ。

「いい加減にしろ！？俺ならばともかくキーナの軍でお前があのレオナを生け捕りにするだ！？」

「・・・・・・」

「やきが回ってるんじゃないのか？キーナと一緒にいたいのなら軍の後ろでやってればいい・・・！」

「なんやて！？」

カイゼルの言葉にいきりたったキーナを制して、ルイが静かにカイゼルの前に立った。

「カイゼル・・・今の非礼を僕に謝罪するんだ。さもないと・・・」

「さもないと・・・？どうするんですか？王子様？」

馬鹿に仕切った態度でカイゼルが切り返すのを見て、シャロンが顔色を変えた。

「だめ・・・！カイゼル逃げて！」

「こうするのさ・・・！」

シャロンの叫びとルイの言葉が交差した。

「・・・・・・・・！」

ルイの踏み込み、抜剣、斬撃はほぼ同時だった。かろうじて後ろに身をのけぞらせたカイゼルの首に、一筋の赤い線が浮き上がった。

プツリ・・・・・・・・

小さな音を立てて首の皮がわずかに裂け、血がうつすらとにじんだ。<・・・・・・・・こいつ・・・・俺を殺す気だった・・・・・・・・>

シャロンの言葉がなければ殺気に気づくのが遅れ、ルイの剣をまともにつけていた・・・

カイゼルは慄然とした。明らかに自分を上回る剣だった。

「わかったかい？君がなぜ保険として後方支援するのか・・・・・・・・」
ルイは剣をおさめて静かに言った。

「君がやるとレオナ・アークスを殺してしまいかねない。今回の任務は生け捕りだ。だから実力差のある僕でなくてはいけないんだ・・・・」

ルイはそういうと天幕を出て行った。

「ルイ・・・・！待って！」

シャロンが天幕の外でルイに叫んだ。

「・・・・・・・・」

「ルイ・・・・思いつめないで。ウォレスを救いたいのは私も同じよ・・・・」

シャロンはため息をついた。

「あなたが仕損じてもそれはあなたのせいじゃない・・・・あなたはこんなことできる人じゃないのに・・・・」

「・・・・・・・・」

ルイは黙ってうつむいている。

「ごめんね・・・・こんなことをさせて。私にもっと力があれば・・・・」

「
シャロンの声が詰まった。

「全部をあなたに背負わせてしまった・・・」

「今はこれしかないんだ・・・」

ルイはかすれた声でつぶやいた。

「ウォレスの命を救うには・・・僕がやるしかないんだ・・・」
そういうとルイは歩き出した。

「ルイ・・・！」

なおも言葉をかけようとしたシャロンの方をキーナがつかんだ。

「もうやめときや・・・」

「キーナ・・・」

「シャロンちゃんは何を言おうともう無駄や・・・」

キーナは吐き捨てるように言つとルイのあとを追つていった・・・

「・・・」

シャロンは黙って空を見上げた。

この戦いはすべてを変える・・・

なぜかはわからないが、シャロンはそう感じていた・・・

真の力

照りつけるような日が頭上にさし掛かった頃……

直属兵2万を整列させ、出撃準備を整えたレオナのもとにカインがやってきた。

「何を考えている……」

カインの言葉にレオナはばつが悪そうに目を伏せた。

「お前とてわかるだろう？ 前の襲撃が成功したのは夜襲で敵の虚をついたからだ……今この真昼間に堂々と攻めかけたところで前のような戦果は望めないぞ……？」

「わかつてるわよ……そんなこと……」

レオナは細い眉をひゅつとひそめて言った。

「ただ……神のご命令にはさからえないわ……」

「命令をしているのは神ではない……教皇だ」

「そして教皇様は神の地上における代行者よ……？」

レオナの答えにカインはため息をついた。

聡明な妹の唯一の弱点……それは『神』という名の下にあの男の言いなりになつてしまふところだ……

「レオナ……」

「大丈夫、心配しないで？ 軽く一当たりして戻ってくる。無理はしないわ……」

レオナは颯爽と騎乗し、兄に笑いかけた。

レオナの号令の元、地を揺るがしレオナ・アークス直属軍2万は突撃を開始した。

「見事なものですね……」

その様子を遠望しルイはつぶやいた。

「一兵にいたるまで命令が完全に行き届いている・・・すごいな、レオナ・アークスは・・・」

「感心してる場合やないで・・・」

横にいたキーナがつと手を伸ばし、ルイの目元に触れた。

「・・・？」

「じつととき・・・」

手早くキーナがルイの目元に施したのは彼女の部族の戦闘の化粧だった。

「キーナさん・・・」

「第6天魔軍はあんたと共に戦う・・・これはその証や」

キーナはにつこりと笑った。

「さあ・・・行こうか・・・」

二人は馬にまたがり前線に向かった。

地響きを立てせまりくるゼメキア軍が500歩の距離に迫った時、キーナの号令の元第6天魔軍の一斉掃射『死の雨』が天を覆う黒い雨となって降り注いだ。

次々と正確な騎射技術によってゼメキア兵がもんどりうって倒れた。

「ちっ！」

降り注ぐ矢の雨を払いながらレオナは舌打ちした。

兄カインの言ったとおり、襲撃を読まれていることと、そして何よりも前衛に一斉掃射を得意とする第6天魔軍がいることでさらに犠牲が大きくなる。

「射返せ！」

レオナは直属軍のさらに精鋭部隊5千を切り離し一気に第6天魔軍に斬り込んだ。こうすることで距離をつめ、まずは一斉掃射をとめることが狙いだった。

そして敵を混乱させる間に、後続部隊が襲い掛かる・・・

だが・・・

「……！」

レオナの思惑は見事に外れた。

まるでその動きを読んでいたかのように、掃射がぴたりとやみ突出したレオナとその精兵五千の突出した隙に第6天魔軍が一気に割り込んだ。

「馬鹿な……！」

レオナは舌打ちした。

完全に思考を読まれていた……。？しかしレオナはまだ慌ててはいなかった。

レオナは第6天魔軍の包囲網の一角に手勢を集中させ、包囲網の突破を図った。

レオナの手には昨夜の鉄鞭ではなく、蛇矛と呼ばれる異形の武器が握られている。

槍のように長い柄の先には蛇のようにのたくった長い刃がついている。この刃できられると傷はきれいにはふさがらず仮に命はその時は免れても後々に傷口がふさがりきらず死に至る恐怖の武器だ……

「かかってこい、異教徒共め……！」

レオナの蛇矛がうなりを上げ、あっという間に数名のミルディア騎兵を血しぶきの下にのけぞらせた。

「……！！」

そのレオナの前にルイが馬を躍らせた。

「何者だ……？異教徒の頭目か？」

「僕はルイ・アルトワ……」

「……！！」

聞いたことがある……

「お前がロンウェーを生け捕りにした……」

レオナの口元に残忍な笑みが浮かんだ。兄ですら一目置いたこの男を殺せば兄も自分の実力を今以上に認めてくれるはず……

「呪われた異教徒に魂の浄化を．．．！」

レオナは一気にルイに馬を寄せ、必殺の一撃を見舞った。

キーン！！

当然にいつもの鎧ごと斬り割る感触を味わえると思っていたレオナの意図に反し、蛇矛は音高くはじき返された。

「な．．．」

思わぬ手の痺れにレオナは目を見張った。

「すみませんが、生け捕りにさせてもらいます．．．」

ルイのおよそ戦場には似つかわしくないすまなさそうな口調に、レオナは逆上し我を忘れた。

「やれるものならやってみよ！」

レオナは蛇矛を握りなおし、全力でルイに打ちかかった。

しかしルイの長剣は難なくレオナの斬撃をはじき返し続け、数十合打ち合ううちにレオナの両腕が悲鳴を上げ始めた。

「ちっ．．．！」

レオナはあせり始めた。

これはまるで兄カインとの稽古のようだった．．．この男の剣技は兄カインに匹敵する．．．

「あっ．．．！」

ルイの斬撃をうけきれず、レオナの蛇矛が宙をまい地面につきたった。

・ 次の瞬間ルイの剣の平がレオナの腹部を強打し彼女は気を失った．．

「やったな！王子！」

「はい．．．」

ぐったりとしたレオナをルイは自らの乗馬にひきあげた。

「レオナ・アークスを生け捕ったこと、敵軍にわかるように全軍に叫ばせてください。退路を必ずあけておくことも忘れないで・・・」
「了解・・・！」

指揮に戻るキーナを見送り、ルイは本営に馬首を向けた・・・

「馬鹿め・・・」

戦況を遠望していたカインは舌打ちした。

後続を切り離して突撃をかけた時点でレオナの判断の誤りを悟ったカインは増援軍を差し向けたが時すでに遅し・・・レオナがミルデア軍の手に落ちたことを知ったのはそのまもなくのことだった。

「レオナ様は名の知らぬ若き將軍と一騎打ちをされ、そやつに生け捕られました・・・！」

兵の報告を聞いたカインはうめいた。

「まさか・・・ルイ・アルトワか・・・？」

「おそらくは・・・」

そばにいたロンウェーが頷いた。

「それがしはやつの剣技の一端しか見ておりませぬが、レオナ様といえども・・・」

「ち・・・」

カインは傍らの兵を見やって言った。

「ミルデア軍捕虜のウォレスを、こっちに引き取ってくるのだ・・・！やつらの狙いは捕虜交換だ・・・」

カインは天を仰いでため息をついた。

「う・・・」

レオナは目を覚ました。

「・・・！」

その瞬間レオナははねおき、剣を探した・・・が、もちろんのこ

と彼女の周りには武器は一切なかった。

「……………」

レオナは痛む腹部を押さえながら、辺りを見回した。

牢獄というより天幕に近い……………」

「気がつきましたか……………」

少し距離を置いて椅子に座っていた青年がにこりと笑った。

「ルイ……………アルトワ……………」

「はい……………はじめまして、レオナ・アークスさん」

「……………」

レオナは敵意に満ちた目でルイをにらんだ。

「異教徒め……………何を考えている？なぜ私を殺さず捕らえた！？」

「大事な友達をかえしてもらったためです……………」

ルイは屈託のない笑顔で答えた。

「あなたの兄上ならこの交換には応じてもらえと思っています」

「……………」

レオナは悔しさで全身が火の様に熱くなるのを感じた。

「大丈夫ですか？力をついつい入れすぎちゃって……………」

苦しげなレオナの様子にルイは気遣わしげに言った。

「だ……………黙れ……………！！」

言葉を重ねようとしてレオナは呻いた。

「しばらくここでゆっくりしてってください。あなたの身の安全

は僕が保障します。」

「馬鹿な……………早く捕虜交換でもなんでもすればいいだろう……………」

「！？」

「見てもらいたいんです……………」

ルイの言葉にレオナは絶句した。

「あなたの神のいう『異教徒』たちがどういう人間なのかを。あなたたちの宗教では生きることすら許されない僕たちミルディア人に

も血が通っていること、心があることを分かってほしい・・・」

「・・・お前たちは呪われた存在なのだ・・・」

レオナの言葉にルイは肩をすくめて見せた。

「どうでしょう・・・僕から見ればあなたこそ何かの力に呪われて
いるように見えますが・・・」

「・・・！」

目を見張ったレオナを残しルイは天幕を後にした。

「マリア・・・」

「はい・・・」

影のように付き従う赤い瞳の少女にルイは微笑んだ。

「大丈夫、レオナさんは賢い人だ・・・きつとわかってくれる・・・」

「

「どうでしょうか・・・あの方はゼメキア教を心底崇拝しておられます。私の追放裁判だって・・・」

マリアは目を伏せた。

その少女の頭をルイの手が優しくなでた。

「大丈夫。ともかくこれでウォレスの処刑はなくなった。少し時間をかけてレオナさんの目を覚まさなきゃこの戦いは終わらない・・・」

「

「はい・・・お考えはよくわかっています。」

「有難う、この天幕の護衛はしっかり頼むね・・・」

ルイはマリアにつこり笑いかけ歩き去っていった。

「ルイ様なら・・・」

マリアはそんなルイの後姿を見送りながらぼつりとつぶやいた・・・

迷い

「異教徒を獄中から出したそうじゃな！どういっつもりじゃ！？」

ゼメキア軍の陣営・・・

教皇イカロスの甲高い声が響いた。

「レオナとの捕虜交換に使いますが・・・？」

カインはそれがどうしたのだと言わんばかりの口調で答えた。

「ゆ・・・許さぬ！せつかく捕らえた異教徒の頭目を・・・！」

「ではわが妹を見殺しになさるおつもりか・・・？」

カインの鋭い眼光にイカロスはたじたじとなった。

「そ・・・そうは言っておらぬ。ただ神のご加護がレオナになくそれがゆえに捕まったのじゃ」

「信心がたりなかったと・・・？」

カインがいきなり立ち上がったのでイカロスは思わずびくりと身を震わせた。

「一つご承知おき願いたい・・・」

「・・・」

「わが妹レオナは敬虔なゼメキア教徒。それは誰もが認めるところ。レオナの信仰をもしもお疑いとあれば、それがしにも考えがありません・・・」

「れ・・・レオナの信心はようわかつておる・・・心配いたすな」

イカロスは神経質に爪をかみながら頷いた。

「・・・危険な男だ・・・」

カインは苦々しくイカロスを見やった。青筋を浮かべぎらぎらした目で爪をかんでいる・・・

こんな男の命令に従ったばかりにレオナはミルディア軍の手に落ちた・・・

「ミルディア軍に使者を出せ。捕虜交換の準備だ・・・」

カインはもう何度目かになるため息をついた・・・

そのころ・・・

ミルディア軍の天幕で・・・

捕虜・・・という扱いではなくむしろ客を遇するような扱いの天幕の中・・・

レオナは苛立たしげに天幕の中を歩き回っていた。

一歩でも外に出れば見張りが目を光らせており、さすがのレオナもここから一人で遁走を試みることはできない。

あの忌々しい異教徒ルイが言ったとおり、カインの捕虜交換の段取りに身をゆだねるしかなさそうだった。

「・・・・・・・・」

<・・・お前が男であつたなら・・・>

脳裏にあの人の声が響き、レオナは懸命にかぶりをふった。

「私だつて・・・・・・・・」

ぼそりとレオナはつぶやき、寝台に横たわり目を閉じた・・・

<・・・お前が男であつたなら・・・>

<・・・やはり兄には勝てぬな・・・>

<・・・所詮は女か・・・>

「・・・・・・・・!!!!」

レオナは飛び起きた。瞬間まどろんでいたらしい。

<・・・嫌な夢・・・>

レオナは額に浮かんだ汗をぬぐった。

「あつ・・・!」

気がつくとすぐそばにルイが座っていた。とっさにレオナは剣を探そうとしてはつとした。

そうだった・・・ここは異教徒の陣だった・・・

「大丈夫ですか？随分うなされていたみたいですけど・・・」

「・・・」

ルイは食事を載せたトレイをレオナの前においた。

「食べてください。何も食べなかったら体に毒ですよ？」

「・・・」

レオナは黙って目をそらした。

「レオナさん・・・僕を見てください」

「・・・」

「あなたと僕と・・・何が違うんですか？」

「ゼメウスの神の加護を受けていない・・・」

ルイの問いにレオナは即答した。

「その神は宗教に属さない者たちの殺戮を認めるんですか・・・？」

ルイの問いは容赦なかった。

「もう一度言います。僕を見てください。あなたと同じ人間です・・・同じように心を持ち同じように大切な人を持ち、そして同じように血を流す・・・」

「違う・・・！」

レオナは呻いた。

「お前たちは淘汰されるべきなのだ・・・それは神が決めたこと！私はそれに従うまでだ！」

レオナはルイが持つてきた食器をつかみルイに投げつけた。

ガチャーン！

皿が割れ、破片でルイの額から血が流れた。

それでもルイはレオナから視線をそらさない。

「神が決めたこと・・・？あなたは教皇イカロスの言うことに従っているだけだ・・・」

「教皇様は神の地上における代行者であり代弁者だ・・・！」

「教皇イカロスの人となりは僕も聞いています・・・」

ルイはまっすぐにレオナの瞳を見据えた。

「彼は神の名を語っているだけ・・・あなたにはそれがわかってい
るはずだ・・・」

「う・・・うるさい・・・!」

レオナは耳をふさいだ。その手をルイがつかんだ。

「この侵略のどこに正義があるんですか？異教徒は生きてちやいけ
ない？でもその異教徒にも家族がいる者や守りたい大切な人がいる
者もいるんです・・・!!」

「だまれえ!」

レオナが叫び思い切りルイを突き飛ばした。

「・・・!」

次の瞬間・・・疾風のようにマリアが天幕の隅から現れ、レオナ
の喉に短剣をつきつけた。

「いいんだマリア・・・大丈夫」

ルイはマリアに微笑みかけた。だがマリアは短剣をおさめようとし
ない。

「じゃあこの子はどうなんですか・・・」

ルイはレオナを見て言った。

「この子はいいい子なんです。とても優しくて・・・まだ小さいのに
僕なんかよりとてもしっかりしてる。いつでもこうやって僕のこと
を心配してくれるとても優しい子・・・」

ルイはそつとマリアの短剣を取り上げながら言った。

「不吉の瞳・・・そうよぶんですよね？あなたの国では・・・」

「・・・」

ルイの言葉にレオナは俯いた。

「こんなにいい子さえも受け入れられないというのなら・・・ゼ
メウスの神の度量も小さなものですね・・・」

そう言うルイは天幕を出て行った。

「・・・・・・」

天幕に残ったマリアをレオナは敵意のこもった目でにらみつけた。
「いい気味だと思うだろう・・・・？お前の追放裁判に私も列席し、
追放に賛成の書類に署名したのだからな・・・・」

「ルイ様は・・・・」

マリアがぼつりと言った。

「食べ物もなくて・・・・疲れきって死に掛けていた私を拾ってくれたんです・・・・」

「・・・・・・」

「私はこの呪われた不幸の瞳を隠したくて隠したくて・・・・ずっと髪を長く伸ばして目を隠してました・・・・」

マリアはレオナに笑いかけた。

「でも・・・・ルイ様は、初めて私を見た時、この瞳を『綺麗な目だね』って言うてくれたんです」

「・・・・・・！」

「この瞳のせいで私は生きていく場所がなかった。自分の親さえも私をまともに見てくれなくて・・・・ただ人を殺す術だけを学んできた・・・・そんな私のこの瞳を綺麗だって・・・・」

マリアはにつこりと笑った。

その笑顔のまぶしさに思わずレオナは目をそらせた。

「私にはそれで十分でした。ルイ様がいる・・・・それが私が生きている今の理由です・・・・」

そう言うマリアは立ち上がった。

「だから・・・・もしあなたがルイ様の邪魔をするのなら・・・・」

マリアは天幕を出て行き際につぶやいた。

「私は喜んで人を殺す術をあなたに使う・・・・ルイ様にはもう使うなと言われていますが・・・・」

「・・・・・・」

天幕からマリアの気配が消えた。

レオナは黙って天幕の隅を見つめた。

「私は……………」

レオナの低い呟きが闇に静かに飲み込まれた……………

過去

翌朝・・・

レオナは眠れぬまま朝を迎えていた。

「・・・・・・」

レオナはそつと天幕の外をうかがった。

誰の気配もない・・・逃げられるとは思っていないし、逃げるつもりもない。

どうせ兄が今捕虜交換の手続きを整えているはず。

ただこの天幕の外から出て新鮮な空気が吸いたかった。

「いるのだろうか？私は天幕の外に出る。逃げるつもりはないが見張りたいなら見張っている」

レオナは自分を見張っているであろうマリアに向けて独り言を言う
と、天幕のそとにでた。

「・・・・・・」

レオナは小さくため息をついた。

<・・・あなたと僕は同じ人間だ・・・>

ルイの言葉が頭から離れなかった。

情けも知らず穢れた存在であるはずの異教徒ルイが、自分たちが追放した不吉の瞳の少女を保護していた。しかも感情を捨て去るように訓練を受けたはずの暗殺者の少女のあの笑顔は・・・

「慈悲の心・・・か・・・」

<・・・馬鹿な・・・>

レオナは自分でつぶやいてみて慌ててかぶりをふった。

そんなはずはない。教皇様の教えによれば、異教徒に慈悲の心など

あるはずがない・・・

「・・・・・・・・？」

レオナは立ち止まった。

小高い丘の上に人影を見つけたからだ。

まだ朝日が昇ったばかりの朝もやの中・・・人気のないところでその人影はうずくまっている。

<・・・・・・・・あいつだ・・・・・・・・>

背格好からレオナはその人影がルイであることに気づいた。

<・・・・・・・・なにをしている・・・・・・・・？>

レオナは静かにルイに近づいた。

「・・・・・・・・！！？」

レオナはルイの姿に息を呑んだ。

ルイは地面にうずくまり胸の前で手を組み祈りの格好をして目を閉じていた。

<・・・・・・・・祈りをささげている・・・・・・・・？>

「お静かに・・・・・・・・」

突然背後でマリアのささやく声がした。

「・・・・・・・・！！」

振り返ったレオナにマリアはかぶりをふった。

「このお時間は・・・邪魔をしないでくださいませ・・・」

「何をしているのだ・・・・・・・・あいつは・・・・・・・・」

レオナはささやき返した。

「お祈りでございます・・・」

「祈り？ミルディアにも神がいるのか・・・・・・・・？」

「いいえ・・・この国は無宗教です・・・」

「では何に祈っているのだ？あの男は・・・・・・・・」

レオナの言葉にマリアは静かに微笑んだ。

「ご自身に・・・・・・・・でしょうか・・・・・・・・」

「・・・・・・・・？」

レオナはマリアの言葉の意味がわからず口をつぐんだ。
祈りをささげるルイの姿はある種の神々しささえ感じさせ、レオナは思わず目を奪われた。

「あの方の祈りは強さへの願い・・・大切な人を守る強さを。そして同時にそれがゆえに自分が奪った命への懺悔の祈りも・・・」
「強さと・・・懺悔・・・」

レオナは言葉を失った。

<・・・・・・・・あの男・・・泣いている・・・・・・・・>

祈りをささげているルイの瞳からは涙が流れていた。

「優しい方なのです。自分のたてた作戦でたくさんミルディア兵、そしてゼメキア兵が死んでいく・・・その事自体に心を痛めておられます・・・・・・・・」

マリアの赤い瞳がレオナを見上げた。

「ゼメウスの神は本当に喜んでいたのでしょいか・・・あのような優しい涙を見てもそう思われますか・・・・・・・・？」

「・・・・・・・・」

レオナはマリアの問いには答えずきびすを返すと天幕に向けて歩きだした。

しばらく後、ゼメキア教国側より捕虜交換の依頼の使者が到着し、ルイの狙い通り捕虜交換が成立することになった。

「狙い通りだな・・・」

集まった天魔王たちの前でリチャードがルイに言った。

「はい・・・・・・・・」

ルイは静かに頷いた。

カイゼルが忌々しげに横を向くのをキーナが苦々しげににらむ。

「捕虜交換は誰が行く・・・？」

「僕が行きます。」

ルイの言葉にキーナがかぶりをふった。

「万が一罾があつたらどうするんや？」

「それはないですよ。こっちが抑えているのはアークス兄妹の妹ですから・・・」

ルイはにつこりと笑って言った。

「むしろ何かあるとしたら、彼女が陣に戻ってからかも・・・」

「・・・？」

いぶかしげな天魔王たちにかまわずルイはリチャードに向き直った。

「向こうの条件どおり、僕一人でレオナさんを連れて両軍の中間地点まで行きます。」

「・・・わかった・・・」

リチャードは重々しく頷いた。

「委細はルイに任せる、皆もそれでよいな？」

「はっ・・・！」

リチャードの言葉に天魔王たちは跪き答えるしかなかった。

「行きましようか・・・」

ルイが馬にまたがりレオナを振り返った。

「・・・」

馬にまたがったレオナは黙って頷いた。

衣服、乗馬・・・武器を除くすべてが与えられている。もし自分が遁走したらどうするつもりなんだろう・・・

「信じてますよ・・・」

レオナの心を見透かしたかのようにルイがレオナに笑いかけた。

「・・・！」

「あなたは公正な人だ。捕虜交換の話をあなたの兄上が持ちかけてきた状態で、約定をやぶるようなことはあなたがするわけがない・・・」

「」

「当然だ・・・私は・・・」

いいかけてレオナは口をつぐみ馬を進ませた。

「私の父は……」

捕虜交換地点に向かいながらレオナがぼつりと言った。

「いつも言っていた……『お前が男であれば』と……」

「……」

「アークス家は代々要職には必ず男がついてきた。女がついたことは私が初めてだ……」

「すごいんですね、レオナさんは……」

「……」

屈託のないルイの言葉にレオナはまじまじとルイを見つめた。

「私は何をやっても兄には敵わない……政治も……用兵も……そして剣技も……父に認められたくて私は必死に努力した……だが父はそもそも女である私がそういうことをすること自体を嫌っていた……」

「……」

「だから私はせめて神の忠実な僕になろうとした……現実主義者の兄に勝てる方法はそれしか……」

「レオナさんはカインさんが嫌いなんですか……？」

ルイの言葉にレオナはかぶりをふった。

「そんなわけがないだろう！私にとって兄は大切な人だ……！」

「じゃあ……」

ルイはにっこりと笑って言った。

「いいじゃないですか。」

「……！？」

「お父上がどう言おうとレオナさんはレオナさんなんだし、カインさんに勝てなくなつてあなたがカインさんを大切に思っているんなら、何の問題もないじゃないですか？」

レオナは言葉につまり俯いた。

「なんでこんな話を私はしているのだろう……しかも異教徒の頭目に……」

「お前は・・・」

レオナが言いかけたときルイが馬の歩みを止めた。
捕虜交換地点・・・そこにいたのはカイン・アークスと数名の警
護兵、そして捕虜となつたウォレスだつた。

「ルイ・アルトワ殿とお見受けする・・・」

「カイン・アークスさんですね・・・」

ルイとカインの視線がぶつかり合った。

「捕虜交換の申し出・・・有難うございました・・・」

ルイがにっこりと笑つて言った。

「礼を言われるか・・・」

カインは苦笑した。

「さあ・・・レオナさん・・・」

ルイに促され、レオナはゆつくりと進み出た。

カインの命令でウォレスも引き立てられながら進み出てきた。

「・・・」

カインは思わず口元をゆがめた。

傷一つなく、賓客のような様相のレオナに対して、拷問につぐ拷問
でやつれ果てたウォレス・・・

<・・・これではどちらが神の兵だ・・・>

自嘲するとカインはレオナを見やった。

「大丈夫か・・・？レオナ」

「ええ・・・ごめんなさい・・・」

「ウォレス・・・！」

片膝を着いたウォレスにルイが慌てて馬を飛び降り駆け寄つた。

「坊ちゃん・・・」

「大丈夫かい？もう安心だよ・・・」

傷ついたウォレスに肩をかしてやりながら、ルイはウォレスを自分

の馬へ押し上げた。

「では・・・これで・・・」

「うむ・・・」

「カインさん・・・」

馬に乗りウォレスの体越しに手綱を取りながらルイが言った。

「何かあれば・・・」

「・・・？」

「ミルディア軍はあなたに味方しますよ・・・これはお忘れなく」

「・・・それはどういう・・・」

さすがのカインもルイの言葉の意味を図りかね、首をかしげた。

「いえ・・・何も・・・」

ルイは肩をすくめて笑うと馬腹を蹴ってミルディア軍の陣のほうへ走り去って行った。

「レオナ・・・」

カインは妹を見やった。

レオナは走り去っていくルイの背中をじっと見つめている。

「なかなかの男だな・・・ルイ・アルトワ・・・」

「・・・ただの異教徒よ・・・」

小さくつぶやくとレオナはきびすをかえた。

こうしてルイの思惑通り捕虜交換が終了し、ミルディア軍の兵たちは今回の一連のルイの働きに驚愕し、そしてルイを称えた。

情弱王子と馬鹿にされていたルイは一気に『自分の才覚を隠していた英雄』となった。

「・・・」

ルイはいつもの天幕の横の小高い丘に一人でいた。

「坊ちゃん・・・」

ウォレスがルイに声をかけた。

「ウォレス・・・！大丈夫かい？」

「鍛え方が違いますからな・・・このウォレスは」

ウォレスは胸を張って見せたが、足の傷は深く杖をついて歩いている。

「有難うございました・・・坊ちゃん・・・」

「・・・」

「坊ちゃんがそのご才覚をひた隠しにされておられたのに、このウォレスが不覚を取ったために・・・」

ウォレスはうなだれた。

「いいんだ・・・どうせ遅かれ早かれわかったことだから。キーナさんにもキーナさんの第6天魔軍にもばれてたしね・・・」

ルイは肩をすくめて見せた。

「坊ちゃん・・・強いことは悪いことではないですよ・・・」

ウォレスの言葉にルイはびくりと肩を震わせた。

「まだ覚えております。あの時のこと・・・」

ウォレスは静かに言った。

「ご幼少の頃から剣の稽古をつけさせていただき、坊ちゃんは10歳ですでに私から一本取れるくらいの腕前になっておいででしたな・

・・・」

「・・・」

「そんな時あんなことが・・・」

「ウォレス・・・」

ウォレスの言葉をルイが静かにさえぎった。

「もう・・・昔のことだよ・・・」

「いいえ、坊ちゃんが変わったのはあの時からでした・・・そしてそれは今も・・・」

ウォレスは悲しげに続けた。

「あなたはシャロン殿を守った・・・ただそれだけです・・・」

「・・・・・・・・」

ルイは苦しげにうつむいた。

『いやああ！こないで・・・・・・・・！』

少女の悲鳴と、手にべつとりついた返り血の感触がルイの脳裏に鮮明に蘇った。

「僕はただ・・・シャロンを守りたかった・・・」

「守ったのですぞ？ならず者に襲われていたシャロン殿を10歳のあなたが助けた・・・」

「ただ僕はそいつを殺してしまった・・・持っていた剣で・・・」

『シャロン・・・大丈夫かい？』

暴漢の死体から剣を引き抜き歩み寄ったルイを見る少女・・・シヤロンの目は恐怖に満ちていた・・・

「シャロンは恐怖でその時の記憶をなくしてしまったんだ・・・」

ルイは寂しげに微笑んだ。

「僕はあの時のシャロンの目を忘れることができないんだよ、ウオレス・・・」

「しかし・・・」

「確かにあの時僕はシャロンを守った・・・でも僕はあんな守り方はもうしたくないんだ・・・」

ルイはウオレスに歩み寄り静かに肩を貸した。

「ぼ・・・坊ちゃん・・・」

「いいから・・・陣に戻ろう？」

歩いていくルイとウオレスを物陰でシャロンとキーナが見守っていた。

こらえきれず嗚咽するシャロンの背中をキーナが黙ってなでている。

「私なんて馬鹿だったんだろう・・・」

「・・・」

「ずっとルイに守られていたんだ・・・私はずっと・・・」
「もうええよ・・・」

キーナが静かにシャロンの声をかけた。

「人を守る強さって・・・何も剣だけやないもんな・・・」
「・・・」

夕暮れの空にシャロンの嗚咽だけが響いていた・・・

守るべきもの

目の前に累々と横たわる死体の山．．．

すべて忌まわしき存在の異教徒たち．．．

『俺たちにも家族がいたんだ．．．』

死体の一体が目を開けて恨めしげにつぶやく。

『お前たちのせいで俺たちは死んだ．．．』

『俺たちが一体何をした．．．』

次々と死体たちの恨みの声が響く．．．

「．．．．．！！」

レオナ・アークスは声にならない悲鳴を上げて飛び起きた。

「．．．．．」

レオナはため息をついた。

ここはもうミルディア軍の天幕ではなく、自軍の天幕。

レオナは寝台から降りるとグラスに水を並々と注ぎ一気に飲み干した。

一体自分がしてきたことはなんだったのか．．．

武器を振るい、異教徒たちを次々と殺してきた。

その肉を裂く感触、血の臭いまでが生々しく蘇りレオナは呻いた．．．

あの男．．．

異教徒の頭目であるルイ・アルトワの目には教皇がいう邪心や穢れなど全くなかった。

いや、自分が殺してきた異教徒たちにもそもそも・・・

レオナは枕元にあるゼメキア教の経典を握り締めた。

ここに書いてある一字一句をすべて暗誦することだってできる・・・
だが自分はこの意味を理解していたのか・・・？

『僕を見てください。あなたと同じ人間です・・・』

ルイの声が脳裏に蘇り、グラスを握るレオナの手に力が入った。

パリン・・・！

鋭い音を立てグラスが手の中で弾けた。

ガラスの破片で切れた手の中から血が滴りおちるのにもかまわずレオナは宙を見つめていた。

同じ頃・・・

「なぜじゃ！？」

甲高い声が天幕の中に響き渡る。

カイン・アークスは苦々しげに教皇イカロスをみやった。

「なぜレオナはすぐに出撃せぬ！？」

「落ち着いてください・・・敵の捕虜状態からようやく抜け出したのです。まだしばし戦場は控えさせるべき・・・」

「ならばそなたが出撃せよ！レオナの失態でわが軍の士気は・・・」

「失態??」

カインの目が鋭くイカロスを見据えた。

「敵の天魔王の一人を討ち、一人を生け捕りにしたことでレオナは味方の士気を大きく上げました。元はといえば直属軍への兵糧部隊

の一件でわが軍の士気が下がったことをお忘れか？」

「・・・・・・・・！」

イカロスのこめかみに青筋が浮き上がる。

「言葉をつつしめ、カインよ・・・我は神の地上の代行者ぞ？」

「・・・・・・・・」

カインの側近たちがイカロスの言葉に身を硬くするのを見てカインはため息をついた。

「わかりました・・・」

カインは静かに立ち上がった。

その全身に満ちる気迫にイカロスは思わずわずかに後ずさった。

「レオナが敗れたことで士気が落ちたのも事実・・・仰せの通り出陣いたしましょう・・・」

カインはじろりとイカロスを見やった。

「ただし・・・」

「ただし・・・？」

「猊下にもいずれ出陣願わねばなりますまい？神の地上の代行者自ら陣頭に立たねばわが軍の士気も上がるというもの・・・」

「な・・・」

絶句したイカロスを残しカインは天幕を出て行った。

ゼメキア軍の中で目を引く一隊がある。

全身を黒の甲冑で固めた騎兵隊の一軍・・・カイン・アークス直属のこの部隊は『不死騎団』とも呼ばれ、その名の通り戦場での戦死率の異常なまでの低さから他国にも恐れられている。

今その不死騎団3万に出撃の合図の角笛が響き渡った。

「兄さん・・・」

すでに馬上の人となり、凄まじい英気をみなぎらせたカインにレオナが声をかけた。

「案ずるな・・・お前は出撃しなくてもいい・・・」

カインは優しく妹に笑いかけた。

「気づき始めているはずだ・・・お前も」

「え・・・？」

「この戦の無意味さ・・・」

カインは遠くミルディア軍の方角を見やりすと目を細めた。

「早くこの戦で優位に立ち、停戦の交渉をせねばならん・・・この戦いでミルディア軍を壊滅させられるかは五分五分・・・仮に成功したとしても痛手から立ち直るまで5年はかかる・・・」

「兄さん・・・」

「お前の迷いは正しい・・・それをわからず同胞を戦死させ続ける
教皇は神の代行者などではない・・・」

そう言うときカインは、黒いマントを翻し出撃の合図を下した。

その頃・・・

ミルディア軍陣営で・・・

第7天魔王マリアが跪いている。

「いよいよカイン・アークス率いる不死騎団が出撃する模様・・・」

「不死の軍団か・・・」

リチャードがため息と共につぶやいた。

先回の戦闘でレオナ・アークスの直属軍の強さは尋常ではなかった。
だがカイン・アークスの直属兵はそれをも凌ぐ・・・

「思ったより早いですね・・・」

ルイはリチャードを見やった。

マリアの報告を聞いているのはリチャードとルイだけである。

「迎撃はシャロンの第5天魔軍の長槍部隊がよいな・・・あとカイ
ゼルの第2天魔軍を遊軍として配置し状況に対応する・・・」
リチャードの言葉にルイが頷く。

「ただ・・・」

「ただ・・・？」

「あの二人を持ってしても・・・やっぱ僕が行かないとまたゴロアさんのような犠牲が・・・」

「うむ・・・」

言葉を重ねようとしたリチャードだったが突然俯き、激しく咳き込み始めた。

「父上！？」

「リチャード様！」

駆け寄る二人をリチャードは手で制した。

その手に血がべつとりとついているのを見てルイは絶句した・・・

「そ・・・それは・・・」

「肺の病だそうだ・・・」

リチャードはマリアを見やって言った。

「マリアの見立てではもう長くは持たんそうだ・・・」

「な・・・」

ルイはマリアを振り返った。

マリアが悲しげに赤い瞳を伏せる・・・

「こやつを責めるな？口止めをしたからな・・・」

「どうして・・・」

リチャードは息子の言葉に優しく笑った。

「愚か者め・・・出陣前にこのことがわかったらいかがする？当然に混乱が起こる・・・その状態で国を守れると思うか？」

「・・・」

「これからはお前が国を守るのだ・・・ルイ・・・皆もお前の力に気がついておる。今のお前であれば皆がついてくるはずだ・・・」

「父上・・・」

ルイは苦しげに俯いた。

「まだ・・・迷いがあるんです・・・」

「誰も迷いはある・・・それをこの戦いで乗り越えるのだ・・・」
リチャードの言葉にルイは頷くと天幕を出て行った。

「マリア・・・少し頼みがある・・・」

リチャードは目を閉じ椅子にもたれかかりながらつぶやいた・・・

地を揺るがし迫りくるゼメキア軍カイン・アークス率いる不死騎団の前に第5天魔軍が迎撃体制をとった。シャロン率いる第5天魔軍の中枢は長さ3・5メートルもある長槍部隊である。

「・・・・構え！」

シャロンの号令の元、第5天魔軍が一斉に長槍を持ち上げ槍袈を作り突撃に備える。

騎兵隊相手の第5天魔軍の強さは定評があり、リチャードの布陣は問題ないかのように思われた。

しかしカイン率いる不死騎団が第5天魔軍に50歩の距離まで迫った時信じられない光景がシャロンの目に飛び込んだ。

不死騎団の騎兵たちが馬を疾駆させながら馬の横腹から取り出し構えたのは短槍だった。彼らは短槍を構えると至近距離から第5天魔軍の前衛目掛けて一斉に投げつけた。

「・・・・！」

これにはたまらず第5天魔軍の前衛の槍兵たちが次々と胸に短槍を突き立てられ、槍袈が一気に崩れたところを不死騎団が襲い掛かった。

「ち・・・」

指揮をとるシャロンの周りにまで一気に不死騎団が食い込んできた。襲い掛かってくる兵の、一兵卒とも思えない油断ならない剣技にシャロンは震撼した。

すでに第5天魔軍の不利を見て遊軍の第2天魔軍が不死騎団の横合
いから切り込んでいるが状況が一向に好転しない。

「く……」

シャロンはリチャードの本営を見やった。ここを破られては一気に
本営まで突入されてしまう……！

あせるシャロンの前にカインが馬を躍らせた。

「天魔王の一人と見た……悪いが死んでもらうぞ？」

カインの凄まじい気迫を前にシャロンの背中に冷たい汗が流れた。

カインの長剣とシャロンの槍が火花を散らす……

10号ほど打ち合いを続けているが誰の目にもシャロンの劣勢が明
らかだった。

そこへカイゼルが駆けつけ、シャロンと共にカインに打ちかかった
が、カインは余裕を持って二人を相手にあしらうような素振りすら
見せた。

「ぐあ！」

まずカイゼルがカインの剣を受けきれず乗馬から吹き飛ばされた。

「カイゼル！」

カイゼルに止めを刺そうとしたカインにシャロンが乗馬ごとぶつか
りかろうじて剣先をそらせたが、その結果カインの前に全く無防備
となった。

「……！！！」

その隙を見逃さず自分の首めがけてカインの斬撃が走るのをシャロ
ンは見た……

<……やられる……！>

死を悟った瞬間シャロンの脳裏に浮かんだのはルイの顔だった……

・
<……ごめんね……>

次の瞬間・・・

キーン！！

シャロンの首ぎりぎりまで迫っていたカインの剣が音高く跳ね返された。

「来たか・・・」

カインはわずかに口元に笑みを浮かべた。

「ルイ・アルトワ・・・」

カインの前に立ちふさがったルイは静かにカインを見つめている。

「遅くなってごめん・・・不死騎団のあの攻撃は僕も予測できなかった・・・」

そういうとルイはシャロンに微笑みかけた。

「大丈夫・・・僕が守ってあげる・・・君はカイゼルを連れてここから退くんだ・・・」

静かに剣を抜くとルイはリチャードに向き直った・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8672w/>

ミルディア国戦記

2011年11月20日08時13分発行